

# 古代日本犬の実像を求めるために

—縄文・弥生時代の出土例集成と、派生した諸問題の確認—

丹 羽 百合子 (日本考古学協会員)

はじめに

- I 地図・表作成にあたって
  - II 地図・表から読み取れるもの
  - III 出土状況・遺存状態にみる犬と人との心情的関わり
  - IV 形態の問題
- おわりに

はじめに

かつてオルテガは、「家畜はほかならぬ人間がそうであるように、退化した動物なのである」と言った。1) ポール・シェパードは、さすがに人間を家畜のリストには加えなかったが、後成的安定を保障していた混合状態の遺伝子群を破壊しつつ進む家畜化と同値のものとして、人間には文明を掲げたのである。2) 70年代のあまりに直線的な反文明論に苦笑しながらも共感するのではあるが、ただ彼のように、ウシ・ウマ・ヒツジ・ヤギと同じニュアンスで、イヌを Tender Carnivore と呼ぶのには、少なくとも縄文犬に対しては、やや抵抗を感じる。

縄文犬を知るというのは、縄文人を識るのと同じである。その実像を求めるためには、彼らがどこから来たのかを問うだけでなく、人と犬とがポリフォニーを奏でながら彼らの日々をどのように暮らして来たのか、その底に狩猟人共通の生き方はどのように脈打っていたのか—こうした問いかけのうち、何一つ無意味なものはない。

これらに確実に答えていくための基礎的作業の開始にあたって、①現在出土が知られている犬遺存骨の資料の一覧と、②現段階で提出された仮説の確認と検証への方向を見定めておくことを、本論の目的としたい。

1920~50年代にかけては、長谷部言人、松本彦七郎、直良信夫、齋藤弘らが資料収集・計測・形態観察・分類を各人の目的意識と熱意を以って行った時期である。その後、資料の増加にもかかわらず、そうした研究が途絶えていたかに見えたが、最近、犬の系統や移動の解明を目指して文献リストを作成した例<sup>3)</sup> や、在来家畜研究会による成果<sup>4)</sup> などが相次いで提出されるに至った。そうした流れの中で

の、一つの研究であることを自覚しながら、さらに筆者自身のこれからの方針を、ここにおいて、見通しておきたいと思う。

## I 地図・表作成にあたって

大給尹が1934年当時文献上で見出した家犬の出土例は32例であった。1942年、未だ縄文早期中頃以前の貝塚が未発見の時代に、既に山内清男が、「犬は日本の石器時代に於て大概の地方に居たらしい」と予見した通り<sup>5)</sup> 早期初頭の例も加わり、<sup>6)</sup> 酒詰仲男の『日本縄文石器時代食糧総説』（1959年）には127例、家畜史の観点から芝田清吾はそれに追加して、170例とした。<sup>7)</sup> 太田克明は、芝田のリストをもとに出土例を時期別に地図上にプロットした。<sup>8)</sup> 山崎京美は、はっきり埋葬犬と報告されている例のみ52例を、文献上で集め、分析を加えた。<sup>9)</sup> 最近の全国的、近世に至る網羅的な県別リストは、茂原信生を中心とするグループによってまとめられた。<sup>10)</sup>

今回、ここに提出するものは、後に続くものとして当然これらの成果を踏まえたものであるが、資料的効果を考慮して次のような点に留意した。

(1) 縄文早~晩期の五期及び弥生期に分けて地図・表を作成し、対照できるようにした。それぞれに、犬遺存体出土の分布をみる時の大概の目安として、遺跡の分布状況を付した。<sup>11)</sup>

(2) リスト作成にあたり、①時期が不明、あるいはあまりに確定しないもの（例えば縄文~弥生に亘るもの）、②出土状況や形態から後世のイヌと思われるもの、<sup>12)</sup> ③イヌ科ではあるが、*Canis Familiaris* と断言できないもの<sup>13)</sup> については除外した。逆に、1986年現在、筆者の知る資料で数例追加したものもある。

(3) <個体数> は報文中の記載や、記載なきものでも、各部位の出土を検討しながら算出した。報告、同定、計測者等が異なる資料については、Nr を付し区別した。<大きさ> の分類は、今後の課題でもあるわけだが、最大公約数的意

味で長谷部による五分類<sup>14)</sup>に従い、報文中にあるものはそのまま、記載なきものでも表・写真図版より推定できるものは出来るだけ推定し、地図上にも大きさが分るよう記号でプロットした。〈残存部位〉は埋葬犬の場合、全身骨格としたが、もちろん厳密な意味ではなく、その他は、分る限り部位名を記入した。計測値の有る場合はどの部位かは重要であるし、将来計測するにしても資料性の高さをあらかじめ知るためである。〈出土状況〉については、貝層・包含層・土壌・住居址・溝など簡単な概念分けをして記入した。人骨片や埋葬人骨と記したのは、このレベルの記載はどの報告文でも比較的普遍性をもつことから、人骨と犬骨との共伴関係を全体的に把むためである。〈文献〉は、同一遺跡内でも報告の異なるものについて、どの標本が該当するかを一瞥できるようにした。同一標本で何度も異なる論文・報告文中に掲げられているものは、二次的集成のものは一応避け、計測値などデータの質の高いものを選ぶようにし、それが無い場合、オリジナルなものを充てた。

## II 地図・表から読み取れるもの

### 1. 資料性

このリストを一覧していると、犬の遺存体とくに縄文犬は殆どが貝塚から出土することから、自づと、貝塚が様々な目的で発掘されてきた研究史を映し出していることに気づかされる。残念ながら、今我々が古代犬について知りたいと思う類の問題意識が先に在って発掘されたことは殆どなかった。19世紀末大森・陸平貝塚などは別として、戦前の貝塚発掘の主流は人骨を求めてのものであった。長谷部自身の報告や、東大理学部人類学教室の教室員であった山内清男、とりわけ酒詰仲男の採集資料が多いのは、その間の事情によるものである。酒詰は、大山史前学研究所在籍中に神奈川県下の貝塚を、<sup>15)</sup>後に人類学教室員時代には全国各地の貝塚・洞穴等を踏査、発掘している。その成果は、戦後(昭和34年)『日本縄文石器時代食糧総説』に集成されるのだが、酒詰採集資料がいかにか多いか、この表をみても分るであろう。踏査や試掘、発掘といっても数日間といった小規模の調査で、例えば、関東地方128例中、51例は酒詰資料を含んでいる。他の獣魚骨類の出土が非常に少ない前期、中期の奥東京湾や東京湾西岸の貝塚でこうした調査中に犬骨が発見されていることは、他種に比べ、イヌのみはかなり出現頻度が高いことになる。それは、彼が至上命令として人骨が出そうなどところを見当をつけ、成功すれば、犬骨もまた発見できたというからくりらしい。このことは、

間接的にせよ、同一地域に人と犬とが埋葬される傾向が、関東の縄文前・中期の頃にも既に見出されることを示唆している。<sup>16)</sup>しかしながら、酒詰個人の研究の興味は、貝塚の分布や貝類組成を根拠とした集団論や、食糧に関する総合的なものであったと思われ、犬骨は同定したのみで、自らそれ以上計測や形態の観察を通じて研究を深めることはなかった。

酒詰の資料を生かしたものは斎藤弘である。彼は、古生物学者、解剖学者、人類学者、考古学者のいずれにも属さなかったが、日本犬本来の姿を希求する透徹した意志は、日本奥地に遺る在来犬探索のみならず、従来誰も示さなかった犬自体を目的に据えた密度の高い研究態度を彼に付与したのである。1940年に史前学雑誌に掲載された論文は、大山史前学研究所所蔵の犬骨の計測とともに、それ以前に各研究者により蒐取されていた犬骨をも含めた〈第一〉～〈第六〉の形態分類を行い、残存部位の概略と計測者、資料の帰属を明記したものである。表をみても分るように、現在でもこの文献が、最も質の高い記載を提供している標本が多数ある。酒詰個人所蔵標本はともかく、大山史前研保管資料が戦災で焼失している事実を思うと、この文献の重要性は測り難い。そして今我々が取り組もうとしている項目は、すでに半世紀前の慧眼にさらされていた。即ち(一)飼育目的、(二)形態的特徴、(三)近隣各地や(四)日本上代～中世の家犬遺骨及び、(五)現代内地山間に残存する日本犬の骨格との比較による系統関係、(六)現代家犬骨格との比較、(七)内地・東亜狼との比較である。このうち、日本狼の研究、<sup>17)</sup>犬科骨格計測法<sup>18)</sup>をライフワークとして他を未完のまま病に倒れたのである。

直良信夫は、松本彦七郎、長谷部言人を主流とする家犬の研究に傍観的立場を標榜していた感があるが、自らは松本の古生物学的調査態度をむしろ望ましいとした。しかし、多元的多彩性を有った当時の犬を細分していく方向には批判的であり、<sup>19)</sup>一方、あまりに計測数字に囚われて本来的姿相を見貫く力に欠けるのではないかと長谷部に代表される解剖学的立場にも疑問を投げ掛けている。犬に関しては故意に発言を避けていた直良も菊名上ノ宮貝塚の十数例は戦前に計測値をあげて報告して居り、<sup>20)</sup>戦後、東海地方を中心とする動物遺体の発掘報告の依頼を受ける過程で徐々に集積されてきた資料や、東北の三貫地貝塚の他、戦前に収集した北方の資料等は、1973年『古代遺跡発掘の家畜遺体』に収められた。

戦後の発掘は、犬に関する限り、長谷部によって報告された吉胡貝塚(1952年)の例以後、大きな進展はなかった。

最近の宮城県田柄貝塚の22例などは例外で、多くの場合、まとまった資料に乏しく、長谷部の五大別（小・中小・中・中大・大）にあてはめる程度に止めて、資料の集積が成るまで論ずるのを保留していたかのようである。しかし、一方では、行政発掘だけではなく、学術発掘の場にあっても、他の動物遺存体が粗略に扱われたのと同じ仕方で、単に種名表にイヌと記載して事足れりとした一連の調査例もある。今回作表した時点でも、出土が知られるのみであとは空欄となっている例がいかにも多いことかと驚きあきれるのである。

問題意識の設定によっては、報告文の内容もかなり左右される。とはいえ、たとえ断片的な資料でも、計測値、あるいはスケールのはいった写真図版は、第一次資料としての報告書ならば掲載しておくべきだと思うのだが。

今後、直接資料にあたるものはできるだけ補足して、空欄を埋めていきたいと思っている。

## 2. 縄文～弥生各期の特徴

遺跡の分布や、犬の推定される大きさ等の様相を各時期をおって以下に概観する。

**縄文早期：**遺跡数22ヶ所。北海道東部と三浦半島東京湾湾口部に中型の犬が出現する。これらは系統を別にする流れと思われる。北方系は、青森県東岸まで南下していたかも知れぬが、神奈川県平坂貝塚（早期）に青森県赤御堂貝塚や長七谷地貝塚にみられる組み合わせ式釣針の鉤先と同系のものが出土しているとのことであり、<sup>21)</sup> 南方系のものが急激に北上したことも否定できない。南方系は、多分、伊豆七島を経て来たものらしいが、東京湾湾口部から湾奥へとどの程度浸透していったかは、現段階では不明である。利根川下流域の花輪台なども含め再調査の必要を感じる。内陸部長野県折原岩陰に小型があり、三浦半島でも小型のものが出土している。この地域はおそらくは南西諸島から西日本を経て広がってきている小型犬の北限で、中型の系統とぶつかり合う地域であつたらしい。

**縄文前期：**45ヶ所。中型は道東東釧路貝塚、秋田県萱刈沢貝塚、福島県宮田貝塚の3ヶ所である。とくに前二者は、早期にみた北方からの流れの残存とみたい。道南から道東へと小型と中小型が併存するのは、本州の影響のようである。西日本は小型のみの出土だが、出土遺跡の多い南関東では、小型から中小型が分離生成してくるきざしがある。また、千葉県富津市大坪遺跡では雌で中小型になる例があること、房総半島東岸新田野貝塚、鶴見川流域折本貝塚で定かではないが中型と報じられている資料があるのは、早

期、南関東へ直接上陸した系統であろうか。この北上ルートにあたるかもしれない福島県宮田貝塚とともに是非標本実査を要す資料である。

**縄文中期：**53ヶ所。中型は関東の2ヶ所を除き消失。関東に圧倒的に集中するのは、遺跡数に比例してのことかもしれない。大きさの分っているもののうち半数は小・中小型を共存させていることから、従来認められている小型一♀、中小型一♂の性差をもった一つのグループが関東を中心に成立していたことがうかがえる。同様の現象を既にこの時期能登半島にもみる。

**縄文後期：**109ヶ所。関東が半数を占める。南島は小型のみであるが、西日本では、小・中小共存型の存在もみとめられる。東海地方は小型のみである。関東は小型を主流として中小が伴う状態。仙台湾～三陸南部は小・中小・中型の三者がみられる地域となっている。中小と中型のみであれば、地理的クラインとみなし、北方に位置して一ランクずつ大型化したと考えることもできよう。しかし、小型も存在することは、縄文後期に至るとこの地域にしかみられぬ中型犬は、他地域とは異なる系統の遺伝子を保っている結果であろうかと想像させるのである。さらに細かく見ると、後期初頭には門前、宝ヶ峰貝塚のように小型だけのところや、青島貝塚の如く小型が中心で中小を混じえるらしい遺跡と、響貝塚のように、中小～中型がみられる遺跡とがあり、一方、内水面帯に入った貝島貝塚での後期初頭には、大きさの不連続な小型と中型とがみられるのである。時期がやや下り、気仙沼市田柄貝塚では、後期中頃から後半にかけて中型♂+中小型♀の組み合わせだが、後期末に至ると、中小+小型と小型化がみられるのである。こうした現象の解釈としては、①時期・地理的にも極く近接した（同時存在とは断定できぬにせよ）集団間においても、大きさの異なる（多分系統の異なる）犬を保持していたこと。②一方で貝島貝塚のように大きさのバラツキの大きい犬が同一集団内に存在したとすれば、その集団の開放度、婚姻関係等による他集団との結びつき（単に犬の自由な往来というより人間集団そのものの動態として把えたい）を示していること。③田柄貝塚の場合のように、同一遺跡にかつて占地したと思われる集団が、全く同質同一のものではなく、ある時不在であつてその構成を多少変化させて戻ってきたり、他集団と入れ替ったりした（その伴う犬も大きさ・系統が異なっていた）可能性等々が考えられよう。

**縄文晩期：**50ヶ所。遺跡数そのものの減少はとくに関東地方の急激な消滅と呼応している。出土例は、遺跡数が後期からさほど変化しなかつた東海・東北地方に二極分解し

ていくようにみえる。関東地方以西は殆どが小型である。東北地方では、福島県薄磯・三貫地貝塚と、宮城県里浜、岩手県中沢浜貝塚に小型が残存しているが、その他は中小・中型となっている。とくに一連の中型が目立つ遺跡があり、即ち、後期末～晩期の沼津貝塚は中型が主体のようであるし、晩期初頭の田柄貝塚では中型でも最大頭骨長 180 mm 以上の大きい個体がみられ、晩期中葉（大洞 C<sub>2</sub> 期）の里浜貝塚には中型の雌が出現する。

《縄文晩期の犬の大型化に対する仮説》：後期から晩期の東北地方の狩猟の様相を照らし出す幾つかの遺物がある。シカ・イノシシの骨体に残された石鏃の痕跡と燕形銚頭・骨鏃（両者とも頭部にスリットのはいったもの）である。

骨体に残された傷痕は、現在十数例（シカが大部分を占める。）知られている殆どが東北地方の後晩期に限られ、しかも、その場で直ちに獲ったことを示す非治癒痕である。他の時期にイノシシ・シカを狩らないわけではない（後晩期に比べ量的には少ないが）にもかかわらず、例を見ないのは多分、骨に当たった鏃は致命傷とはならず、狙った獲物は逃げ去ってしまい、再びそれに遭遇して射ち獲る確率は低かったせいであろう（あるいは中期までの間にむしろピークがあるといわれる陥穽との相補関係も考慮すべきだが）。人が生きる為に捕獲する数は、自然生息数を決して脅かすはずもないのである。後晩期はイノシシ、シカの捕獲量はたしかに増加する。しかし治癒痕ならばともかく<sup>22)</sup> 非治癒痕は、狩猟圧による生息数の低下を証明することはできない。この骨に残る痕跡が物語るのは、前の時代までは逃げ去っていたものを、確実に倒すことができるようになったらしいということである。筆者はこのことを矢毒の存在を裏づける根拠としたい。治癒痕をもつものは東海地方蜆塚の例のみであり、矢毒の主原料となったと目されるトリカブトのうち毒性の強いものは西日本にはないということと関連づけられよう。<sup>23)</sup> 燕形銚頭や骨鏃がこの地方を中心に後晩期に出現・盛行しているのは、毒を塗り込める装置を前提とする利器として、矢毒と組み合わせて考えることができよう。

ところで、田柄貝塚出土の骨体の非治癒痕—イノシシの肋骨及び肩甲骨—にはそれぞれ同時に 2ヶ所射込まれた痕跡がある。<sup>24)</sup> 危険の伴う猪猟において決して的を外さない射手の技と獲物を釘付けにして置く犬の猟技（矢が同時に発射されたとすれば集団猟であり、犬の止め鳴きによって矢を番える間が確保できれば単独猟とすることもできよう）を目の当たりにする思いである。

縄文晩期というのは、狩猟が余裕をもって行われた時代

では最早なくなっていた。とくに関東地方では沖積地化により水産資源の支えが殆ど無くなり、人々は、集団間の協業によって生業の効率を高めていたことも推測されている。<sup>25)</sup> 少なくとも、他の時期にはないシカ・イノシシ遺体の集積する地点を有ち、単に解体処理しただけでなく何らかの儀礼的行為も伴っていたのではないかと推測させる例が晩期末葉に在る。東北地方でも後期末から晩期にかけてこうした祭礼の意味も含めて人々が合流することもあったのではなかろうか。<sup>26)</sup>

前述した現象、東北地方晩期の犬の大型化には、このような狩猟の様相とそれを必要とした時代背景が関与しているのではないだろうか。さらに具体的に大型化の理由として、①異なる犬の系統の流れこむ地域であったため、しだいに雑種強勢の様な現象が表われた。②上述の如く、人や犬の接触・協同・合流等の機会が増え遺伝子の組み替えが強化された。③猪猟などに有利なように等々の必要に駆られて人為的作出（淘汰）が採られた（その方法の一つとしてオオカミとの hybrid が全くなかったとは言い切れない）というようなことが列挙できよう。しかし、これらを即座に証明する手立てを我々は今のところ有たない。後述する形態の細かい研究やイノシシ・シカ遺存体等の出土状況や残存部位の片寄りなどの精緻な分析とが、検証の可能性を与えてくれるだろうという見通しが在るだけである。

弥生時代：北海道における弥生時代併行の続縄文期では、道南が中小・小型の犬のようだが、江別太や道東では、中・中小とやや大型で、形態も北方的で巾広い顔貌をもつ。

弥生時代は北九州、近畿に新たな分布をみるが、北九州の中・中小の大きさのものは朝鮮半島南端から東シナ海にかけて迎れる。<sup>27)</sup> さらにもう一つ、類型的形質よりすれば（後述）、江南と近畿とを繋ぐルートも考えられる。大阪の亀井遺跡では、その二つの系統が混在しているらしい。さらに多分定住しながら、前期・中期・後期と時を経るにつれ、小型中心から中型中心へと漸移的大型化がみられるという。<sup>28)</sup> 縄文時代からみれば短時日のうちの急激な形質の変化—吻端の短縮、ストップの目立ち、四肢の短縮（これらはとくに No.9 号犬において顕われている）—が、この同一遺跡内で生起していることから、水稻栽培に大きく規定された生業の中で、犬の役割や食物その他犬を取り巻く環境の変化の影響がいかに過激であったかを知ることができる。

古代中世～近世の参考資料となり得る出土例は最近とみに増し、文化的背景や、文献資料とつき合わせることで

きる良好な資料が各地域の差異をも検討可能な程集積されつつある。資料批判を経れば、中近世という現代に近い末端から、逆に古代、弥生、縄文へと霧にとざされた部分へとしだいに遡って行くことを期待してもよさそうである。

### Ⅲ 出土状況・遺存状態にみる犬と人との 心情的関わり

#### 1. 埋葬・散乱

縄文時代に犬が埋葬されていた事実を出土状況から明確に示したのは酒詰伸男である。神奈川県西ノ谷貝塚（縄文前期諸磯式期）発見例であったが、山内清男もその発表会席上で、一体分の発見例は既に何度か見聞している旨を述べている。<sup>29)</sup> 昭和11年当時、ようやく埋葬犬の概念が生じたことになる。この認識からは、人骨と同様の扱いを受けている犬は、家畜であるというテーゼめいたものが出来、一方で埋葬状態を確認できない犬骨、即ち「散乱骨」が対立概念として据えられることが一部には起こったようである。筆者は、埋葬されている事実から、犬は縄文時代には既に家畜であったと証明して犬についての問題を終結する程不毛なことはないと思っている。また、散乱骨については、家畜の補集合として食用と意味づけすることには二重の意味で反対である。つまり、第一に散乱骨は埋存後の二次的攪乱によるものが殆どである。これは発掘の現場に直接携わる経験の多い研究者が直観していることであって、筆者もそれに従いたい。第二に、家畜という語が、ウシ・ウマ・ヒツジと同様の広義のものとする、家畜＝食用の結合の方が自然であろう。おそらく犬を家畜と呼ぶ時は、“人間にとって親しい”との意味が暗黙のうちに含まれているようである。

縄文時代には、大概の地域では犬を食用とすることは無かったし、死にあたっては、埋葬したと考えてよい。<sup>30)</sup> 今後、為すべきことは、定義の曖昧な“家畜”という言葉に犬を押し込めるのではなく、犬の実際の姿の様々な場合での片鱗でも良いから、復元して具体的に描き留めておくことであろう。

かつて酒詰は、『食糧総説』の余論としてイヌを養うことの面倒さは二の次にしても食料の面からも負担が大きく、飢えを免れるために時には食用としたかもしれないと述べているが、現在の飼犬のイメージから慢然と類推したように感じられる。また、埋葬骨でなければ、消極的ではあるが食用の可能性ありとする見方もある。<sup>31)</sup>

しかし、食用の問題は、骨体に残る解体痕などからの積

極的理由によって論じられるべきだと思う。東北地方宮城県館貝塚においては、骨体に切痕や破碎の痕があり、残存状態のバラツキもあったという。<sup>32)</sup> この例や、北海道では未だ埋葬と呼べる資料が無く殆どが一部分の骨であることは、縄文時代の主流とは異なる犬の扱い方（厳寒という気候、あるいは北方的文化伝統の流入による食用の可能性）が在ったか否かの再検討を要すと思われる。北海道ではその後、即ち続縄文期から食用のきざしが見え、擦文、オホーツク、アイヌ各文化期は皆、解体処理の仕方、死亡年齢が若年(1.5才未満位)に片寄ること、埋存状態から明らかに犬の食用が存在したことが知られているのである。<sup>33)</sup>

#### 2. 犬牲について

埋葬が犬自体のための行為であるのに対し、他者に対する捧げ物として扱われる場合が犬にもある。

縄文時代中期末の最花貝塚（青森県）では、ツキノワグマと同様に、顔面頭蓋と下顎骨前半部分とを残存する状態で出土しており、両者とも、アイヌの熊祭りの時のクマの頭骨の扱いを彷彿とさせるという。<sup>34)</sup> 一般にクマ祭りは神の許へ帰ったクマが再生して人間界に獲物として戻ってくることを願うとされている。最花貝塚の場合、イヌも同様に供えたことがほぼ同一地点でみられたことから、後のアイヌのクマ祭りなどに固定する以前の原儀礼に属しているとも考えることもできる。北方狩猟民の間では、狩猟神とか動物主とかに捧げる動物の種類は、供犠する者の生活のちがいによっても変わるといふ。コリヤークの場合のシュテルンベルクの説明を借りれば、犬は海の主、山の主を問わず捧げることのできる“人間界の生き物”として犠牲獣に選ばれたのかもしれない。<sup>35)</sup>

こうした例は、縄文時代のむしろ北方的要素の濃い特殊例と考えてよいと思う。<sup>36)</sup>

礼記によれば、宗廟の犬を羹犬といい、宗家の主人が犠牲獣として飼養していたという。周の時代には、天子も犬を副食として新穀を試食、犬牲を掌る官は犬人と呼ばれたという。

日本の犬遺存体の中にも、弥生時代以降、犬牲にまつわる出土状況を示すものを幾つか掲げることができる。

弥生時代の中期の大阪府瓜生堂遺跡の方形同溝墓主体部からは、イヌの上下遊離歯を得ている。奈良県大福遺跡では、弥生後期に比定される長頸壺形土器が土壌内より発見され、その中には小型犬一個体分の骨が詰っていた。これらは死者の食物として供献されたのであろうか。<sup>36)</sup>

時代が下って、山口県土井2号墳の陶棺の下からは小型

犬の頭部が出土した。

殷代の人骨の周辺には肢を縛ったような不自然な形で土壙から犬骨が発見されている。明らかに殉葬と判るものだが、日本でも、弥生時代以降殉葬の列に犬が加えられることもあったようである。縄文時代には宮城県前浜貝塚や、愛知県大曲輪貝塚のように合葬かもしれない例はあっても、殉葬は無い点、<sup>37)</sup> 犬に対する意識の大きな相違を感じざるを得ない。

### 3. 焼骨について

地図・表から判るように、縄文前期～晩期さらに一部は弥生時代にかけて、埼玉、群馬、山梨、長野県などの内陸地帯で、犬骨が報告されている。焼けて小破片になった状態で、おそらく多くの場合他種の獣骨片とともに配石墓、集石墓に関連して覆土中に散布しているのである。これらは、焼骨となったために他の骨のように消失せずに偶然残存したとする見方は根拠が薄い。料理の際にこげる位の火力では、白変、黒変等の骨質の変化や、亀裂、変形などの形態の変化を生じさせることはできない。骨を焼き、散布する行為に貝塚とは異なる方法の儀礼的行為を見る意見に傾聴すべきものがあると思う。<sup>38)</sup> 少なくとも内陸部における火と関連した儀礼の存在を肯定する者は多い。<sup>39)</sup>

以上のように縄文から弥生にかけての人と犬との心情的結合の変化は葬制において顕著である。これらの推定に、犬骨そのものの観察はもとより、発掘現場での出土状況の観察は非常に重要である。今後の慎重な発掘作業による資料の蓄積を待たねばならない。

## IV 形態の問題

最後に、犬の問題を総合的に明らかにするためには避けて通れぬ形態について述べておきたい。

一般に縄文犬は体高41～43cmを中心とする小型犬であることが知られているが、顔貌、全体のプロポーションなどは未だ明確な復元ができていない。

これを求める作業は、計測とともに、非計測部位の類型的分類も行う必要がある。

計測による分類については長谷部（1952年）の五分類を踏襲している現状であるが、時期・地理的変異があるかどうかを観るには、今後、四肢骨もそろっている完全骨格の資料をできるだけ求め、有意差を含んだ基準値を設定することが第一段階であろう。次に一部分しか残らぬ骨も加え

てなるべく多くの資料でもってグルーピングすることが望ましい。計測値による分類では、厳密には雌雄別にすること、経年変化により影響を受けやすい部位（例えば頭骨のうちでは頭骨全長が最も変化の顕著な箇所であり、基底全長が最も安定しているという。<sup>40)</sup>）の変異巾を考慮しておかねばならない。

非計測部位の類型的分類では、分類の基準となる有効な部位を見出すことがかなり難しい問題となっている。

ところで、形態を研究する時、計測・非計測の適切な項目の設定と実査はもちろん大事であるが、こうして得られた結果をどう解釈するかは問題意識を反映してくるだけに複雑で、結局各研究者に委ねられることになるのであろうか。以下において筆者なりの見方を書き記してみたいと思う。

例えば、家畜化の過程の様な問題は一般に大きなrangeを取って考察する場合が多い。Olsenによれば、①吻端の短縮（側面的にも変化）→②歯列の短縮（欠歯、P<sup>3</sup>等が斜めになる、歯自体の小型化）→③吻部の凹み が家畜化の過程で掲げられる変化である。<sup>41)</sup> 日本で適応されるとすれば、大きく時代の隔る縄文犬と中近世犬とを比較していこうとする場合であろう。縄文時代の内部あるいは縄文～弥生へとといった細かい変化をとらえるには、このような目立って大きな骨の変化の尺度では透き間からすべり落ちかねない。また、形態の変化の意味づけを家畜化の過程という一元的なものでは説明し切れなように思われる。ここでは、形質の変化を説明づける方向を大きく1.環境的要因 2.人為的要因 3.系統的要因に分けて認識し、異なる時間的rangeの中で生じたいくつかの形質変化の現象を例にとりあげ、上記の三つの観点から意味づける試みを示してみたいと思う。

### 1. 環境的要因

①自然環境：高緯度になる程同一種でも大型化するという現象のスクリーンは、大略的には縄文犬にもかけられているようである。分っている範囲では東海地方の縄文犬は小型の中でも小さく、東北地方になると、中小～中型へと大きくなる傾向が確かにある。

②飼育環境：マクローリンによれば、「人に飼われているオオカミも大型の獲物を殺すために顎をつかう必要がなくなり、市販のドッグフードを与えられていると、親よりも顎が短くなる」という。<sup>42)</sup>

従来、いわゆる額段（ストップ）の程度は家畜化現象の特徴にあげられ、斎藤弘が系統問題を<sup>43)</sup> 茂原信生・小野寺寛が時間的地理的変異を<sup>44)</sup> 考察しようとした時の一つ

の根拠としている形質である。もし、マクローリンのいうような実験結果を受け入れれば、額段の程度は、むしろ、食餌行動の違い、飼育環境の差異に由来するのではなからうか。

咬む力を左右する側頭筋（犬はとくに発達している）の停止点即ち下顎骨筋突起を支点とするテコを考えれば、食餌の変化等により咬筋が弱くなるのが先行すると、咬む力を維持するためには吻が短くなることで対応せざるを得ないという単純な力学的説明が成り立たないであろうか。また、しばしば形質人類学の分野で問題にされ、力学的解釈を与えられている鼻根部形態は犬にもあてはめてよいと思われる。<sup>45)</sup> 縄文犬と弥生以降の犬とを比較する場合、鼻骨の中心線の長さ・巾の短縮、側面観の直線的から中凹に湾曲する、全体に華奢なものへの変化が看取されるのである。

③文化的環境：さらに時間のrangeを大きくとって、縄文時代～中世とを見渡した場合、東北・関東のみならず、西日本、とくに小さい型だけしか出土をみない南島においてさえ、犬の体軀の大型化現象がみられる。<sup>46)</sup> 別系統の問題としても検討を要するが、特定地域ではなく、全国的な現象であることに注目すべきであろう。むしろこの現象は、人の身長が増大と同じく、<sup>47)</sup> 栄養状態の改善、あるいは人の移動の頻繁化という文化的要因によって生じたヘテロシス（雑種強勢）として解釈し得るのではないだろうか。

## 2. 人為的要因

犬を人間の必要や、好みによって、淘汰・作出していくことは、幾つかの系統が既に流れ込み、遺伝子の混淆状態が激しくなった状況の下では容易に想定できることである。

幕末の“狩犬”は、シーボルトのファウナ・ヤポニカにも描かれている。最近、江戸末期伊賀者屋敷跡から多量のイノシシ・シカ遺存体の集積に近接して、埋葬されていた犬が発掘されたが、<sup>48)</sup> その頭蓋は、シーボルトの“狩犬”がかなりの写実性を有っており、それらが縄文犬の面影を濃く残していたことを物語っている。一方で、中近世の大部分の発掘資料から、大柄で額段の強いシーボルトが“街犬”として記録したような犬が多く存在したことも分っている。こうした事象は、立耳・額段の目立たぬ顔貌をもつ犬は、狩にも優れた能力を潜ませている犬であることを人々が経験的に知り、人の管理的飼育の下で古い形質と能力を保存継承していった明らかな例とってよいであろう。

縄文時代は、大略的にみれば、小型を中心として変異巾の少ない均一的な犬種を形成しているの、人為的淘汰の

影響は無かったとみられている。が、今回の作業過程を通じ、縄文犬の中の時間的・地理的違いを見出し、こうとした時には、次に触れる系統的問題とも関連して、やや見解が異なってくる。即ち、東北地方仙台湾～三陸南部の地域においては、いくつかの系統が流れ込んだ歴史的背景が遺伝子レベルの下地を形成しており、田柄貝塚2号犬や沼津貝塚のような中型犬の中でもかなり大きいタイプの犬を生み出していったのではないかと思うのである。縄文晩期の人々が何故それを求めたかは、前述のような狩猟が生業の中心になっていく、あるいはならざるを得なかったであろう時代の事情に依ると思われる。

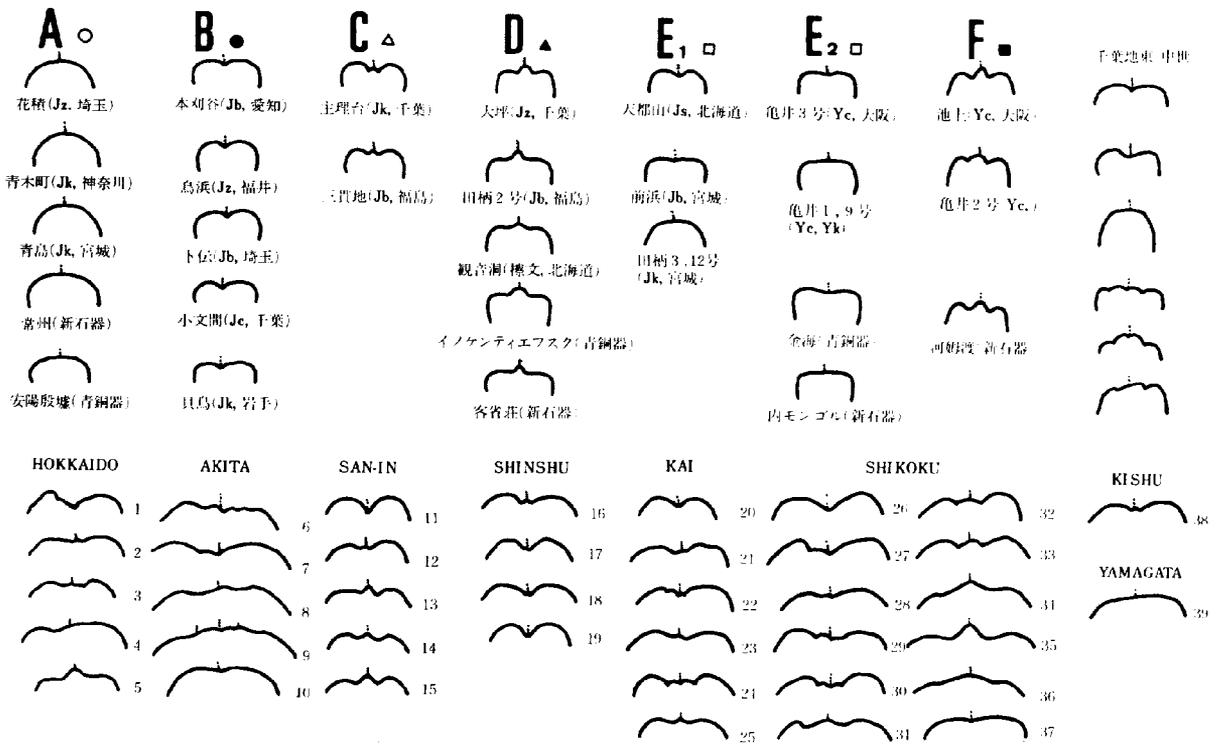
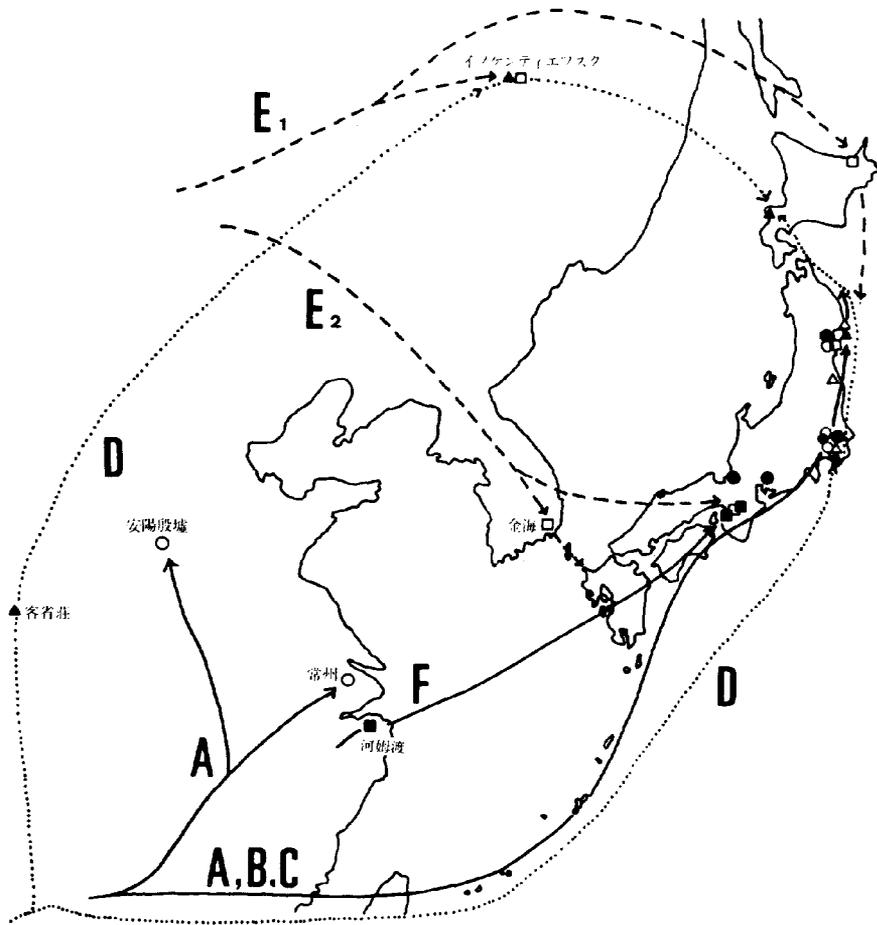
## 3. 系統的要因

我々は、とかく、犬骨の大きさや特徴的形質をとらえて、即座に系統・ルーツの問題を論じようとしがちであるが、上述の如く、自然・文化環境、人為的淘汰などの要因が、程度の差こそあれ複雑に絡みついていることを思うと、難しさにたじろぐ思いがする。しかし、また、見方を変えれば、系統問題が全てではなく、こうした様々の要因を多面的に解きほぐしていくことこそ歴史的に犬を研究していくことなのかもしれない。

ところで、太田克明氏は、今泉吉典の掲げた類別的形質は淘汰の対象外の形質であるから犬遺骨の系統的研究への適用の可能性があることを示唆している。<sup>49)</sup> 筆者も、今回一つのテストケースとして、小原・今泉（1980）による現生日本犬各種間の頭骨の形態の特徴を示標とした系統問題へのアプローチを試みた。以下に簡単にそれを記録しておきたい。

犬の頭骨のうち、ここで取り上げたのは、翼状骨間窩（mesopterygoid fossa）前縁の形状だが、これは、現生各日本犬種間の差異に比べ時代を遡る程、すっきりした形状の差異として表現しており、系統問題に有効な淘汰をうけない（外観では区別できない）形質でなおかつ形態の特徴・差異が把握しやすい部位と判断したためである。縄文～弥生の標本でこの形状が残存するもの数例をえらび、図のように A～Fに分類した。

日本列島の小型犬の主体を形成すると思われる南方起源の大きな流れが一つ考えられる（A・B・C）。中小～中型のやや大きいタイプに属し、南関東に直接上陸した可能性のある流れ（D）もある。他に、北方回りの流れが縄文早期ごろから前期はじめにかけて北海道東部に一部流れ込んでいる（E<sub>1</sub>）。弥生時代には、同じEタイプが朝鮮半島経由で入り（E<sub>2</sub>）、江南地方と結びつけられる別の系統（F）



翼状骨間窩前縁の形態分類による系統の流れ想定図

と近畿地方で合流している。

現生日本犬にみられるタイプと対照させると、A Bは信州柴犬 (No.16~19) に、Dは北海道犬 (No.5) に、Eは強いていえば山形犬産の犬 (現生標本は一例のみ、No.39) に、Fは山陰柴犬 (No.13) に類似型を見出すことができる。

一般に、古代家犬の *metapterygojd fossa* の方が、形状が純粋でバラツキが少ない。参考例として略図を付した中世、鎌倉市千葉地東遺跡出土のものを見ると、既に現生標本と同様、不整形や非対照のものなど、類別しがたい形状を示す標本が加わっている。古い系統のレリックもみられると同時に、後世になる程交雑の度合いが高まった表われとみられないだろうか (擦文期北海道観音洞遺跡の形状は北海道犬No.5—Dタイプ、江戸末期四谷三栄町遺跡内出土のものは信州柴犬No.19—Bタイプに類似し、縄文時代の資料と大きな差がみられない。これらは、レリック的色彩の濃いものといえよう。)

以上のような系統の流れは、土器の系統、骨角器、その他遺物の系統と大きくは矛盾しないようである。例示を以下に記しておきたい。

ところでその前提となる移動についてだが、一回性のものではなかったと考える。恒常的に開かれたルートではないが、縄文時代の各期を通じて時々はそのルートの人や物が移動することもあったように思われる。それは、集団自体は定住したまま婚姻などのネットワークに組み込まれて、集団から集団へと静かに滲透していく変化と異なり、一回の移動の速度は驚異的に速く、海流に乗って遠くまで到達する。

北方的要素 [縄文早期：海獣肋骨製オープン・ソケットの銚頭 (青森県長七谷地貝塚、一王寺貝塚など)、中期：クマ祭りの頭骨儀礼—クマ・イヌ (青森県最花貝塚)、晩期：オープン・ソケットの銚頭 (岩手県瀬沢、福島県寺脇貝塚) etc.] が各時期にその地域一帯に認められる伝統とはやや孤立して出現するのは、上述のような移動によるものではないだろうか。犬の北方ルートを通ってきたと想定したタイプ (E<sub>1</sub>) はこれに対応する。

南関東へ直接上陸と考えられるルート (D) に対応する要素を挙げてみよう。縄文前期、千葉県大坪貝塚ではヒョウタンが出ているし前期~中期の新田野貝塚は、イノシシ・シカをこの時期にしては多く捕獲する特殊な生業の在り方を示している。縄文後期、東京湾湾口部の房総・三浦半島両端部では、曲軸系釣針やラインショルダーを有つ銚頭を伴う積極的に外洋に適應して特殊な経済を展開した集団が居た。これらは、分布の中心を伊豆七島に求めることが

できるかもしれない。さらに骨角器の伝統は房総半島東岸を北上し、いわき地方に至っている。

おそらくこの二つのルートより以前に、A~Cのタイプをもつものが、日本列島に入り、定着し、縄文時代には既に均質化の傾向をもつ小型犬、縄文犬の基盤ともいえるタイプを形成していったのであろう。しかし、海流に乗って移動するイメージを重ねあわせると、縄文犬の中での大きさや形態の変異に集団間の移動という具体的レベルでの幾許かの解釈が成り立つようである。仙台湾~三陸地方南部が、海流のぶつかりあう地域であるのも、全く無意味とは言えない気がする。

弥生時代にも、*metapterygojd fossa* の二つのタイプ (E<sub>2</sub>、F) が在った。

縄文時代よりもはるかに短い時間であり、文献に登場する時代とも隣り合わせているわけで、水稻耕作を伴った集団の移入は、縄文にくらべ、より具体的となり得るはずである。ここでは、形質人類学的観点から、二つのタイプの対応がみられることを示しておこう。

形質人類学では、弥生人頭骨にみられる二つの型—高顔型・低顔型—を、朝鮮半島を経て北回りのルートの集団の移動 (高顔型) と江南~南西諸島ルートの移動 (低顔型) とに想定する見方がある。<sup>50)</sup> これはそのまま、犬の場合の E<sub>2</sub> (北回り)、F (江南) の系統と対応させることが可能である。

かつて筆者らは、江南の河姆渡遺跡と大阪府池上遺跡のイノシシ幼獣の割合の類似を以ってイノシシ飼養における両者の関連を考えたことがあるが、<sup>51)</sup> このことをも含めて、弥生時代に、二つのルートから、犬や人の移動があったことを積極的に受容してもよいのではなからうか。

#### おわりに

縄文犬の実像を求める長い行程の第一歩として、現在知られている資料の有効性や標本の状況を文献上で確認しておくことを、今回の作業目的としたのであるが、そこから派生した問題については、仮説に終始し、実証性に乏しいとの批判をまぬがれ得まい。しかし、直接縄文や弥生時代を考察するにせよ、あるいは、中近世の資料という我々に近い入口を通して、やがて縄文時代へと遡って行くにせよ、作業の行く手には、犬だけではない、縄文時代の実像—日々の生業、集団同志がまるでブラウン運動をするように動く様子や、海流に乗って移動し、生活する集団のダイナミズム等々—が、あたかも霧が少しずつ晴れるように姿を現わすのではないかという期待が、本論の後半を書かした

ことを記して御寛恕を願うものである。

単に日本犬の姿を求めるのであれば、どの時代でも、それが真の姿なのである。たとえ縄文犬にしても、時期的地理的に絶えず変化にさらされていることは上記の通りである。それにもかかわらず、ことさら縄文犬の姿を追い求めるのは、それが日本犬の祖型だからという表面的なものだけではないと思う。それは、犬が、おとなしい家畜として人工的な形にたわめられることなしに、むしろ人と共に在ってこそ生来の能力を発揮していったと思われる時代は、我々現代人にとっても、生の本質を一瞬照らす大切な時代だからである。

未調査の標本については、できるかぎりの機会をとらえて計測・観察等を行い、確実な資料を今後増やしていく作業の一端を担うつもりである。

### 謝 辞

本論作成にあたり、金子浩昌氏には Olsen、Braunner、A その他、朝鮮、中国、アムール川流域等、大陸例の文献についての御教示を頂いた。また、かなりの数の頭骨の実見の機会を与えて下さった。資料で不明な点を問い合わせるに際し、阿部恵氏、遊佐五郎氏、西本豊弘氏、中山清隆氏、中村若枝氏、樋口喜重子氏を煩わした。抜刷を頂き、茂原信生氏、劔持輝久氏からは多くの示唆を得た。記して感謝する次第である。

牙編集部井上雄氏には本誌掲載の機会を与えて頂いた。末筆乍らお礼申し上げます。

(1986. 7)

### 註

- 1) ホセ・オルテガ・イ・ガセ 西澤龍生訳 1978『反文明的考察』東海大学出版；P 235, 引用の「狩猟の哲学」は1945年刊。
- 2) ポール・シェパード 小原秀雄・根津真幸訳 1975『狩猟人の系譜』蒼樹書房；P 20—21
- 3) 茂原信生・西本豊弘・松井章・土肥孝 1985『古代家犬の系統と移動に関する研究』—昭和59年度 文部省科学研究費補助金(総合研究A) 研究成果報告書— P 1—61〔古代家犬出土リスト(地名表)及び参考文献リストから成るもの。〕
- 4) 在来家畜研究会 1980『在来家畜研究会報告』No. 9
- 5) 山内清男 1942「石器時代の犬小屋」『民族文化』

- 6) 神奈川県夏島貝塚…縄文早期夏島式(燃糸文系) 愛媛県上黒岩岩蔭遺跡…縄文早期(押型文系) 山口県秋芳洞窟・上部洪積世のものとして報告されている例は、現在、層位等再検討の余地ありとされている。
- 7) 芝田清吾 1969『日本古代家畜史の研究』；P 41—70
- 8) 太田克明 1980「犬の家畜化並びに日本在来犬の起源と歴史(総説)」『在来家畜研究会報告』No. 9 在来家畜研究会；P 77—81
- 9) 山崎京美 1982「縄文文化におけるイヌの埋葬について」『国学院雑誌』
- 10) 茂原信生ほか 1985 前掲書
- 11) 小山修三 1984『縄文時代 コンピュータ考古学による復元』中公新書733 中央公論社；P 25
- 12) 宮城県宇賀崎貝塚出土のものは、大きさ(最大頭骨長18mm)と形態、埋葬姿勢から、また熊本県山鹿貝塚の家犬骨は、同じく埋葬姿勢、出土層位、全体のプロポーションから縄文時代としない方が良くと判断した。
- 13) 岩手県楯ヶ崎貝塚出土のものはイヌ科とのみ記されている(K. Kishinoue 1911 Prehistoric Fishing in Japan, College of Agriculture Imperial Univ. of Tokyo, Vol. II) 北海道大曲洞窟出土例は、キツネと指適されているのでこれに従った。(畠山三郎太 1968「北海道大曲洞窟出土のイヌ科動物頭蓋骨について」『北海道考古学』第4輯 北海道考古学会) 以下のものは、大きさよりオオカミの可能性が大きいと考え、除外してある。 日向洞窟(第三頸椎：推定最大頭骨長200mm以上、直良 1973『古代遺跡発掘の家畜遺体』校倉書房；P 241 門前・二日市・瀬沢貝塚(松本彦七郎 1917「介塚の犬の二型あり」『動物学雑誌』No. 344；P 181—182 大洞貝塚(C地点出土、長谷部資料中の1、長谷部言人 1925「陸前大洞貝塚(発掘)調査所見」『人類学雑誌』40—1；P 1—11)
- 14) 長谷部言人 1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会；P 145—150
- 15) 酒詰仲男 1938「神奈川県下貝塚調査概報II」『人類学雑誌』53—2；P 41—67
- 16) 本表中より人骨出土の記載のある遺跡を拾い出し、時期別にみると、縄文早期：3/22(犬骨出土の遺跡数)、前期4/45、中期7/53、後期8/109、晩期11/50
- 17) 斎藤弘 1936「石器時代犬の体格とヤマイヌ鑑別私見」『日本犬』5—4；P 1—30、「追加一」『日本犬』

- 5-5 ; P18-21  
 「日本狼総論」、「日本犬と狼との関係」「日本狼の足」  
 「日本狼の頭骨」以上『日本の犬と狼』雪華社、所収  
 斎藤氏自身が書いているように、氏の狼の研究は、古代  
 家犬骨から狼のものを除き、より正確な古代犬の姿相を  
 極めたいという意図の下に行なわれた。
- 18) 斎藤弘吉 1963『犬科動物骨格計測法』  
 19) 直良信夫 1975『日本産動物雑話』 ; P170  
 20) 直良信夫 1942「史前遺跡出土の獣骨(九)」『古代文  
 化』13-5  
 21) 金子浩昌・忍沢成視 1986『骨角器の研究—縄文篇 I  
 —』慶友社 ; P154  
 22) 岩手県貝鳥貝塚出土のイノシシ頭蓋・前頭骨部分には、  
 石槍状のものが食い込んできたらしい陥没部2箇所と  
 石鏃による穿孔1箇所が観察できた。これらは皆治癒痕  
 であったため、Neo-Nygaard (1974) が紹介したヨーロ  
 ッパ中石器時代のイノシシとの類似を指適したことがあ  
 る(土肥孝編 1982『縄文時代II(中期)』日本の美術3.  
 No.190、至文堂 ; P94)が、この例は、イノシシのとくに  
 骨の丈夫な前頭部分というむしろ例外的なものとみた方  
 がよいと思う。
- 23) 辻秀子 1983「可食植物の概観」『縄文文化の研究  
 2 生業』雄山閣 ; P38  
 24) 阿部恵 1985「石鏃のささる獣骨」『季刊考古学』  
 No.11 ; 口絵構成  
 25) 林謙作 1980「貝ノ花貝塚のシカ・イノシシ遺体」  
 『北方文化研究』13 ; P75-134  
 26) 岩手県三陸町宮野貝塚の様相は、イノシシの頭骨の集  
 積など儀礼も行なわれた可能性も示すに充分であろう。  
 27) 仙波輝彦 1960「長崎県壱岐島中期及び後期弥生式時  
 代遺跡出土哺乳動物骨の研究」『人類学研究』7-1・2  
 28) 宮崎泰史 1983「亀井遺跡のイヌについて」『亀井遺  
 跡II』大阪文化財センター ; P183-230  
 29) 山内清男 1942「石器時代の犬小屋」『民族文化』  
 3-8 ; P243  
 30) 長野県諏訪郡原村では、飼いならされたオオカミの骨  
 格が、平石の集石の下に埋められていた例を、戦前、直  
 良信夫博士が見聞しているという(『日本史探訪』I、  
 角川文庫 ; P147 )  
 31) 岡村道雄 1982「人と犬の埋葬」『里浜貝塚』I、  
 東北歴史資料館 ; P69  
 32) 林謙作 1971「宮城・浅部貝塚出土の動物遺体—分析  
 と考察—」『物質文化』17 ; P20  
 33) 続縄文期の例として下田ノ沢、擦文文化期の例として  
 観音洞遺跡出土の頭骨を実見する機会を金子浩昌氏より  
 与えられた。  
 オホーツク文化期の埋存状態、年令構成の特殊性は、金  
 子氏が、1982『動物と自然』12-1に「古代北方の海洋  
 文化と犬」と題して書いておられる。  
 34) 金子浩昌 1969「下北半島における縄文時代の漁獵活  
 動」『下北』九学会連合下北調査委員会 ; P120  
 35) ロット・ファルク 田中・糖谷・林訳 1980『シベリ  
 アの狩猟儀礼』人類学ゼミナール14、弘文堂 ; P73  
 36) 岩手県蛸ノ浦貝塚でも住居址中よりイヌの頭骨のみが  
 出土したという(西村 1963)。また、千葉県上高根貝塚  
 では、イヌの下顎骨を加工しようとした痕跡がみられる。  
 オオカミ、カワウソ、キツネなどを素材とした下顎骨穿  
 孔品と同じ意図の加工であれば、非常に珍しいといえる。  
 37) 青森県二ツ森貝塚では、殉葬的なものとの見解がある  
 が再検討を必要とする。  
 38) 高山純 1977「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有す  
 る意義(下)」『史学』48-1  
 39) 新津健 1982「配石と祭祀」『歴史公論』9 ; P60  
 40) 小原巖・今泉吉典 1980「日本犬の頭骨及び歯にみら  
 れる形態的特徴」『在来家畜研究会報告』9、在来家畜  
 研究会 ; P139-154  
 41) Stanley J. Olsen 1985 *Origins of the Domestic  
 Dog the Fossil Record*, the Univ. of Arizona  
 Press Tucson Arizona ; P23  
 42) J. C. マクローリン 澤崎担訳 1984『イヌ—どのよ  
 うにして人間の友になったか』岩波書店  
 43) 斎藤弘吉 1966「日本犬中小型の始まり」『日本犬中  
 小型読本』愛犬の友編集部 ; P7-13  
 44) 茂原信生・小野寺覚 1984 人類学雑誌92(3) ; P187  
 -210  
 45) 遠藤万里 1984「人類学領域のバイオメカニクス—脊  
 椎骨と頭蓋骨の形態と構造—」『人類学』人類学会編  
 日経サイエンス社 ; P110-123  
 46) 金子浩昌 1984『勝連城跡』勝連町教委  
 47) 山口敏 1984「日本人の生成と時代的な推移」『人類  
 学』人類学会編 ; P63  
 48) 新宿区三栄町、区教委による調査実施中。  
 49) 太田克明 1980 前掲書 ; P69  
 50) 山口敏 1984 前掲書  
 51) 金子浩昌・牛沢百合子 1976「池上遺跡出土の動物遺  
 存体」『池上・四ツ池遺跡』6 ; P9-26

縄文時代早期家犬出土遺跡分布図

遺跡数

0-3

9-48

48以上

凡例

- 小
- △ 中小
- ▲ 小・中小
- 中
- 不明
- 
- 
- 
- 

第1-a 図

1 : 4,300,000

1 : 5,000,000

地図No.	遺跡名	標(個)本体数No.	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文	献
1	天都山	①	中	頭蓋・下顎	有	首部のみ埋存	高山三郎 1973 北海道大についての発書、北海道史研究 創刊号; 41-63	
2	野口						岡本勇 1967 青森県三沢市野口貝塚、年報15; 87-89	
3	赤御堂					2号貝塚	江坂輝弥 1957 三戸郡大館村赤御堂貝塚調査概報、奥南史苑2; 81(直良)	
4	葉ノ山						伊東信雄 1940 宮城県遠田郡不動堂村葉山貝塚調査報告; 4(酒詰実查)	
5	三村						慶応高校歴史部 1956 茨城県石岡市三村字地蔵久保三村貝塚発掘報告 Archaeology 23, 1-18	
6	花輪台						吉田裕 1948 茨城県花輪台貝塚概報、日本考古学1-1; 27	
7	城ノ台			下顎	*有		酒詰伸男 1959 日本縄文石器時代食料総説(酒詰同定資料)	
8	飛ノ台						酒詰 同上 (酒詰同定資料)	
9	夏島	①	中	下顎 fr.	有		直良信夫 1973 古代遺跡発掘の家畜遺体; 234	
10	野島	Nr 1	中	下顎			直良 同上、238 第50図	
		Nr 2	小	下顎				
11	吉井城山	④	中小・小	下顎 Hu.			赤星直忠ら1961年発掘分(金子浩昌同定資料)	
12	茅山	①	小	下顎			斎藤弘 1940 大山史前学研究所蔵日本石器時代家犬遺骨に関する報告、並に内地史前家犬の分類、史前誌12-4-5=6; 57-169 [赤星採集所蔵]	
13	稲原					北斜面 人骨	岡田茂弘 1952 安房国稲原貝塚調査概報、貝塚41(酒詰同定資料)	
14	橋原岩陰	①	小	C	有		宮尾謙雄他 1985 早期縄文時代長野県橋原岩陰遺跡出土の哺乳動物 第6報 イヌおよび中・小型食肉獣、長野県考古学会誌	
15	先刈			C 胸椎			渡辺誠 1980 先刈貝塚、南知多町教委; 83-84	
16	鶴籠(S-C)						酒詰伸男 1959 前掲書(酒詰同定資料)	
17	帝釈観音堂(Js-c, Yz-)		小	C Ul. Fe. etc. Ul. Cal.		包含層	田中正昭 1976 帝釈峠遺跡群、帝釈峠遺跡群発掘調査団; 201-209	
18	上黒岩岩陰	②		全身骨格		埋葬	石田克 1978 広島県上黒岩岩陰、日本の洞穴遺跡; 224-250	
19	不動ヶ岩屋					洞穴内包含層	岡本健児 1968 第二章 縄文時代、高知県史 考古編; 13-166	
20	城ノ台			下顎 fr. Ra. fr.		人骨	長谷部言人・酒詰 1941 土佐佐川町城台石灰洞堆積調査概報、人誌56-9; 215-218	
21	西唐津海底					人骨	松岡史・森醇一郎 1982 未定園、唐津湾周辺遺跡調査会; 54-57	
22	渡具知東原			下顎		包含層	知念勇 1977 渡具知東原第1-2次発掘調査報告、読谷村教委; 21	

第1-a表 (縄文早期)

<部位名略号一覧>

C	上顎犬歯	At.	第一頸椎
C	下顎犬歯	Ax.	第二頸椎
P.	前臼歯	V.	脊椎骨
M.	後臼歯	Rib.	肋骨
Sc.	肩甲骨	Pel.	寛骨
Hu.	上腕骨	Fe.	大腸骨
Ul.	尺骨	Ti.	脛骨
Ra.	橈骨	Cal.	踵骨
Me.	中手骨	Tal.	距骨
Mct.	中手or中足骨	Cox.	寛骨臼
Dig.	指骨		
fr.	破片		

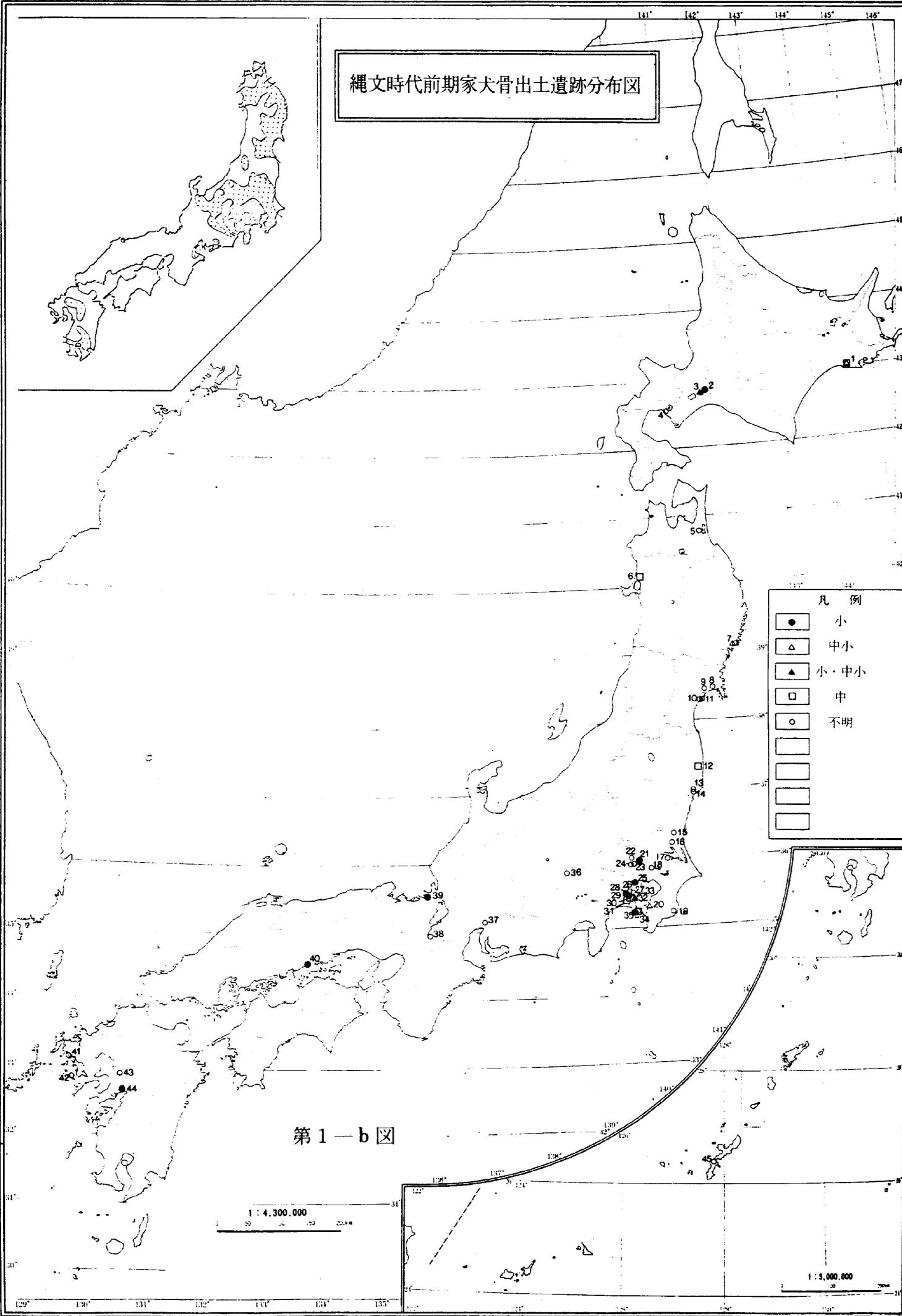
<誌名略号一覧>

人誌	人類学雑誌
史前誌	史前学雑誌
年報	日本考古学年報
考誌	考古学雑誌

文献は、動物遺存体の執筆担当者の名を掲げた。字数に制限があるので、報告書の場合は細かい標題は省略した。

\* 茂原信夫 1986 東京大学総合研究資料館所蔵、長谷部言人博士収集  
大科動物資料カタログによる補足部分

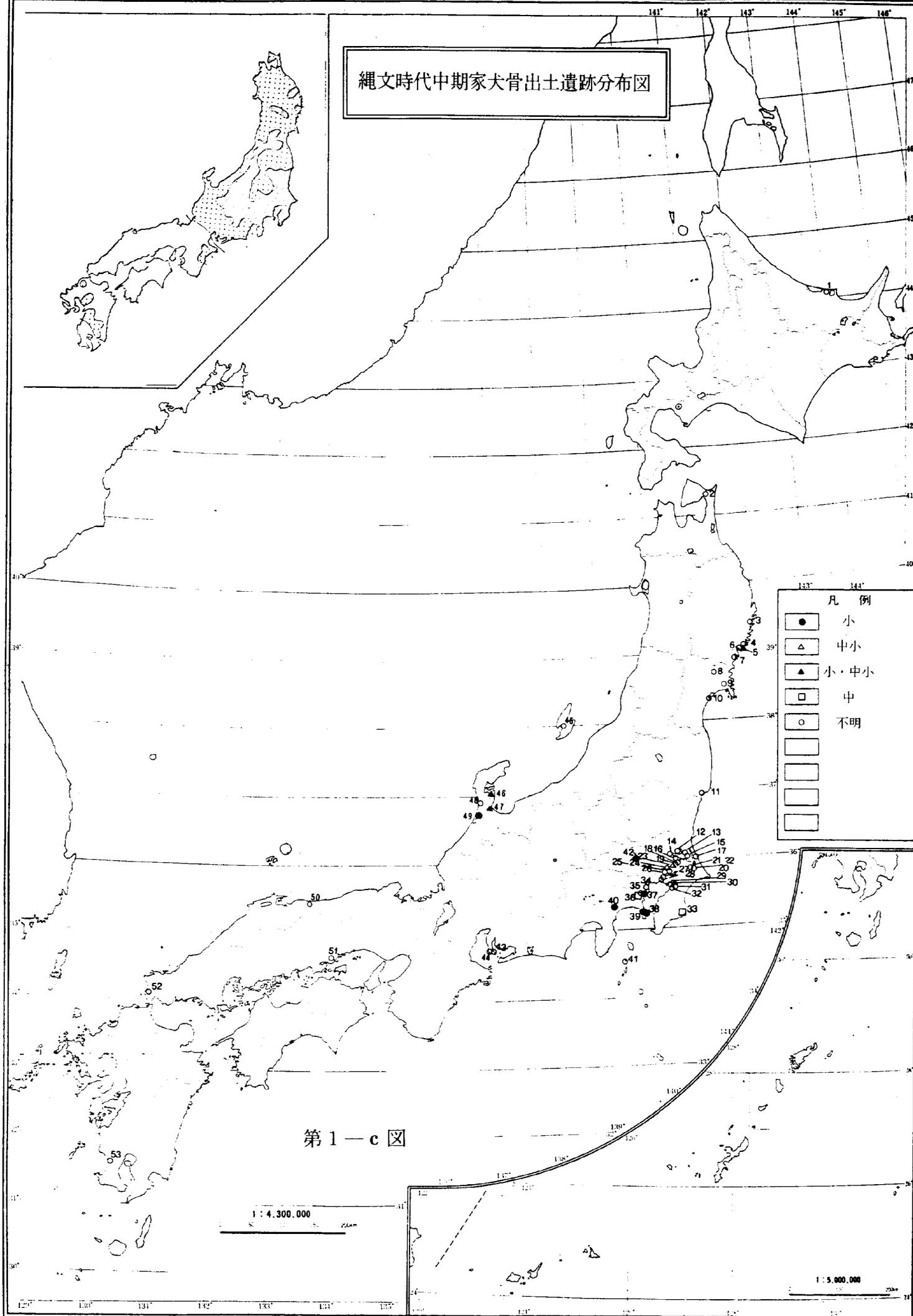
縄文時代前期家犬骨出土遺跡分布図



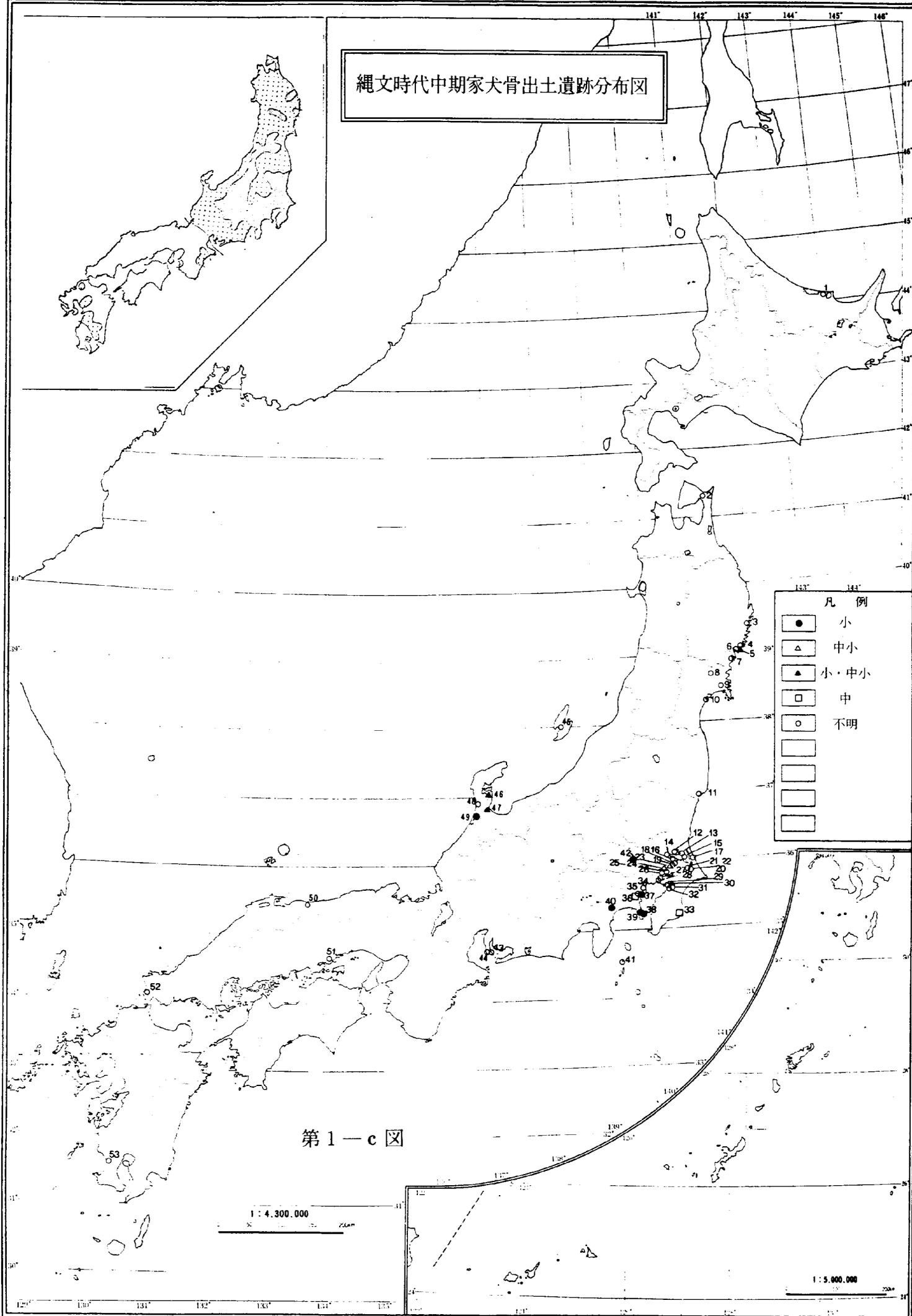
第1—b 図

地図 No.	遺跡名	標本数 No.	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文	献
1	東釧路	Nr 1	中	下顎 fr.	有		富山三郎太 1973 北海道犬についての覚書、北海道史研究 創刊号；41—63	
		Nr 2		全身骨格		ベニガラ散布埋葬	岡崎由夫・沢四郎 1974 新釧路市史(一)	
		Nr 3	中小 ♀				沢 1970 釧路川流域の先史時代、釧路川〔1965年度調査・金子浩昌保管〕	
2	美々		小	Pel. fr. Ti.	有		西本豊弘 1976 美々貝塚、千歳市教委；34—36	
3	美沢4遺跡	②	小	Ra. Pel. Ti.		第1貝塚(東斜面)	西本 1980 フレベツ遺跡群、北海道埋文センター；64	
		④	中小	Hu. Ra. Ul. Pel. Fe. Ti. Met. V.		第2貝塚(平坦面)		
4	入江	①		Fe. Ax.			北海道虻田郡虻田町 1966年発掘資料(鈴木洋子同定)	
5	二ツ森	①		全身骨格		女性人骨と近接埋葬	村越潔 1975 青森県の原始時代、青森県の文化シリーズ11、北方新社；168	
6	萱刈沢	②	中	全身骨格・散乱		フラスコ状ビット内、底面の人骨の上	富山憲次 1974 第3・4次概報 萱刈沢貝塚 八竜町教委(金子同定)	
7	清水	Nr 1	中小	(Hu. Ul. Fe. Ti. V.)		江坂1957年発掘と同一の埋葬犬?	西村正衛・菊池義次・金子浩昌 1958 岩手県大船渡市清水貝塚、古代 29—30合併号	
		Nr 2		Hu.			林謙作 1976 大船渡市清水貝塚発掘調査概報 岩手県文化財愛護協会；25—28	
8	平田原	①					塩釜女子高 1969 貝輪5、10/金子 1973 矢本町史1 先史、171—172	
9	貝殻塚	①				貝層中、埋葬	後藤勝彦 1985 仙台湾沿岸の貝塚と動物、季刊考古学11；23—30(73調査)	
10	左道	③					後藤 1985 同上(1971年調査)	
11	大木厩B	①?				若干まとまって出土	山内清男 1942 石器時代の大小屋 民族文化3—8、248	
12	宮田	②?	中?	Ra. Ul. Ti. 顎V.		人骨	渡辺誠 1975 福島県相馬郡小高町宮田貝塚、小高町教委；22(1973年調査)	
13	西郷						古野高光 1983 西郷貝塚範囲確認調査報告書、いわき市教委；13—17	
14	弘源寺						渡辺一雄 1966 年報14(昭和36年度版)、90	
15	大串	①		Ti. fr.			酒誌仲男 1949 日本考古学3 日本考古学研究所；9	
16	野中						江坂輝弥・直良信夫 1954 茨城県野中貝塚調査報告、考誌39—3・4；49—60	
17	虚空蔵			下顎			石田守一 1978 国士館大学文学部研究室報告乙種5、35—36	
18	二ツ木					斜面貝層中	鎌遠喜彦 1955 年報3、43	
19	新田野	⑨?	小・中小・中・中大?(中型中心)			破片多い	立教大学考古学研究会 1975 新田野貝塚、59	
20	大坪	①	中小 ♀	頭蓋		低湿地包含層	金子 1978 縄文時代遺跡出土の動物遺存体(2)、考古学ノート7；1—18	
					有		茂原信生・小野寺覚 1984 田柄貝塚出土の犬骨について 人誌82；187—210	
21	花積	①	小	頭蓋 下顎 四肢			斎藤弘 1940 大山史前学研究所々蔵日本石器時代家犬遺骨に関する報告、並に内地史前家犬の分類、史前誌12—4 = 5 = 6；57—169(酒誌採集)	
22	坂堂						酒誌 1959 日本縄文石器時代食糧総説(酒誌同定資料)	
23	黒谷北						酒誌 1959 同上(酒誌同定資料)	
24	大戸						酒誌 1951 同上( )	
25	上沼部	①		下顎			斎藤 1940 前掲書(佐野淡一採集・所蔵資料)	
26	南郷						林新ら 1943 武蔵国横浜市南郷貝塚の発掘、古代文化14—1・3(酒誌同定)	
27	矢上谷戸						酒誌 1959 前掲書(酒誌同定資料)	
28	西ノ谷	①	小	頭蓋 下顎 四肢		埋葬	酒誌・竹下次作 1936 神奈川県東郡辰野郡中川村山田字西ノ谷貝塚における埋葬された犬の全身骨格に就いて、史前誌8；77—93/斎藤 1940 前掲書	
29	北川	②	小	若年一体分・下顎骨			斎藤 1940 前掲書(豊元採集・所蔵資料)	
30	下組西						大給尹 1943 神奈川県下組貝塚における自然遺物、史学22—1	
		①	中	Ax.			直良信夫 1973 古代遺跡発掘の家畜遺体；241	
31	折本	①	中?	下顎			直良 1973 同上	
32	菊名宮谷	⑧—⑩		頭蓋 fr. 下顎 Sc. Hu. Ra~	有		斎藤 1940 前掲書	
		①		若年一体分				
32	菊名上宮	⑨	中小・小	下顎	有		直良 1942 史前遺跡出土の獣骨(9)、古代文化13—5；291—300(桑山龍進資料)	
		②	小	下顎			直良 1942 同上；297/斎藤 1940 前掲書(江坂輝弥採集資料)	
33	寺ノ谷						酒誌 1951 前掲書(酒誌同定資料)	
34	高坂		小	下顎			斎藤 1940 前掲書(赤星直忠所蔵資料)	
35	吉井城山	①	小				赤星直忠ら 1961年発掘分(金子同定)	
36	釈迦堂遺跡(ZorC)			裂肉歯2		土壌墓中多量の炭化物・骨片有。人骨片	田代孝 1985 犬笛、歴史読本 昭和60年11月号	
37	太曲輪			全身骨格		男性人骨胸部付近に埋葬	金子 1983 夫は良き友だった、アニマ121；6—11	
38	石山						丹信夫・塚本桂 1956 石山貝塚、平安学園考古学クラブ；7—11	
39	鳥浜						西田正規 1979 鳥浜貝塚 縄文前期を中心とする低湿地の遺跡の研究 I、福井県教委	
		①	小	頭蓋			福井県教委 1985 鳥浜貝塚 V—1984年度調査概報・研究の成果 164—165	
40	羽島	①	小	脳頭蓋 上顎 fr.	有		長谷部言人 1924 Über die Schädel und Unterkiefer von den Steinzeitlich-Japanischen Hunderassen, Arb. Anat. Inst. Univ. Sendai, 10；1—33	
41	下本山岩陰						麻生優 1972 下本山岩陰、佐世保市教委；17—18	
42	伊刀木			焼竹片?				
43	尾田(ZorC)			下顎			田辺哲夫 1977 熊本県玉名郡尾田貝塚、年報15；119—121	
44	轟宮ノ荘	①	小	脳頭蓋 fr.	有		長谷部 1924 前掲書	
45	伊波	①	小	下顎 Hu.			斎藤 1940 前掲書(大山柏採集・東大人類所蔵)	

縄文時代中期家犬骨出土遺跡分布図

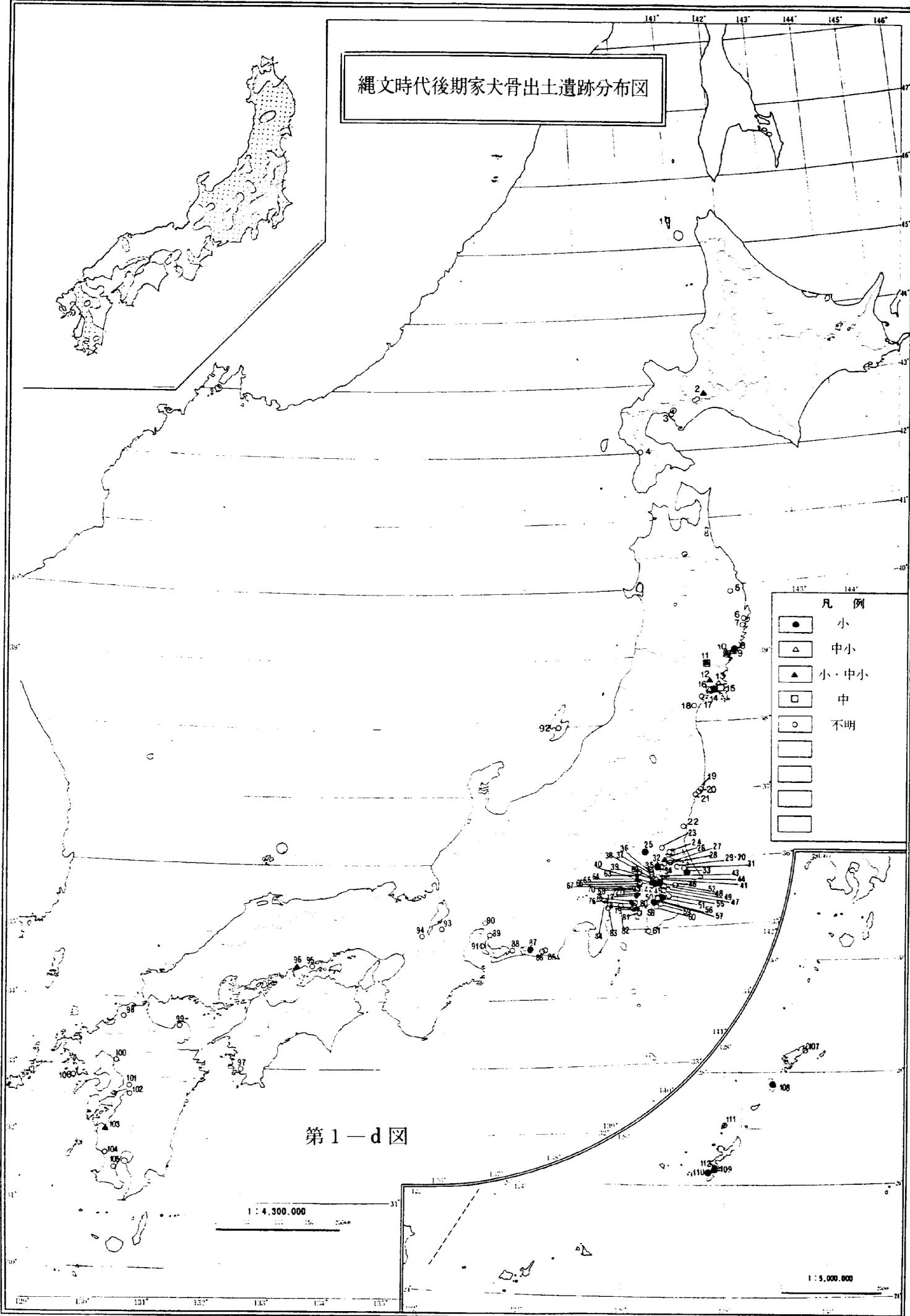


縄文時代中期家犬骨出土遺跡分布図



地名No	遺跡名(標本No)	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文	献
1	朝日トコロ		骨片 (60片位)		出土骨中出现頻度は最も高い	直良信夫 1963 オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡	上、東大文学部；230—260
2	最花A 最花D		前頭部～下顎(右) 下顎小 fr.		クマの前頭部の様相と同一(クマ祭り)	金子浩昌 1969 下北半島における縄文時代の漁獵活動、下北、九学会連合下北調査委員会；120 金子・牛沢百合子 1977 最花貝塚第1次調査報告 むつ市教委；36	
3	崎山弁天		C			岩手県大槌町教委 1974 崎山弁天遺跡；149—164 (金子同定)	
4	蛸ノ浦		頭骨		貝層 頭骨のみ出土 埋葬人骨	西村正衛 1958 蛸ノ浦貝塚、大船渡市社教シリーズ；5	
5	門前	①	小♀ 全身骨格		埋葬犬	江坂輝弥 1970 縄文時代における犬の埋葬骨格、考古学ジャーナル40；6—8	陸前高田市 1980・81年度調査分
		①	小 下顎				
		①	中小 頭蓋				
6	大陽台	①	Ul. (幼)			牛沢 1979 大陽台貝塚、陸前高田市教委；15—29	
7	南敷知 (Z-C)		C		石組周辺焼土、人骨	宮城県南敷知高校社会班 1970 気仙沼市南敷知遺跡発掘調査報告；20	
8	浅部					林謙作 1971 宮城・浅部貝塚の動物遺体分析と考察、物質文化17；7—21	
9	南境	⑥	下顎			楠本政助 1975 矢本町史 先史；64	
10	大木開				人骨	七ヶ浜町教委 1976 史跡「大木開」環境整備調査報告書II	
11	大畑	⑩	全身骨格3			金子・牛沢 1975 大畑貝塚、いわき市教委；447—508	
12	牛渡					酒誌 1959 日本縄文石器時代食糧総説(酒誌同定資料)	
13	若梅					鹿嶋高校 1952 Archaeology (一部酒誌同定)	
14	上高津		上顎 fr. C, M <sup>1</sup>			赤沢威 1972 Report of the Kamitakatsu Shell-Midden Site, The Univ. Museum, The Univ. of Tokyo.	
15	小牧					酒誌 1959 前掲書(酒誌 昭和25年9月踏査、同定資料)	
16	陸平	Nr 1				Iijima and Sasaki 1883 Okadaira Shellmound at Hitachi, Univ. of Tokyo.	
		Nr 2			急斜面貝層中	酒誌 1951 年報1 (昭和22年度版)；40—41	
17	二重作					酒誌 1959 前掲書(川上聰採集、酒誌同定資料)	
18	村田				人骨	西村正衛 1981 村田貝塚、年報21・22・23 (昭和43・44・45年度版)；175	
19	向地 (C-K)					西村 1981 同上	
20	阿玉台	Nr 1	下顎			下村三四呂・八木發三郎 1894 阿玉台貝塚より出たる獸骨、人誌9—101	
		Nr 2				酒誌 1959 前掲書(酒誌同定資料)	
		Nr 3				西村 1963 阿玉台貝塚、年報(昭和32年度版)；83—85	
21	白井雷					西村・金子 1954 千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚 第2・3次調査、早大教育学部紀要学術研究3	
22	白井大宮台 (C-K)				人骨	西村 1955 白井通路貝塚 年報3	
23	小文間西方		全身骨格		住居址内埋葬犬 乳児含む人骨	取手市教委 1983 取手市小文間における縄文時代中期の貝塚(金子保管)	
24	布瀬	④	中小♀ Ra. Pe. Fe. Ti. ...fr. Hu. Ra. Ul. Fe. Ti. ...fr.			金子 1961 布瀬貝塚、印幡手賀 早大考古学研究室報告第8冊；150—181	
25	向油田					酒誌 1937 下総国向油田貝塚、人誌52—12	
26	岩井 (C-K初)					酒誌 1959 前掲書(酒誌一部採集、同定資料)	
27	海老ヶ作	Nr 1	全身骨格		埋葬犬	金子 1961 海老ヶ作貝塚 前掲書	
		Nr 2	全身骨格		住居址内埋葬犬	船橋市教委 1975 海老ヶ作貝塚 第二次発掘調査概報	
28	高根木戸	③	中小・小		住居址内3体埋葬	金子 1971 高根木戸 八幡一郎編 千葉県船橋市教委	
29	荒屋敷					酒誌 1959 前掲書(酒誌同定資料)	
30	加曾利	1号	小♀(若獣)		土壌内埋葬犬	金子・長岐 1977 加曾利貝塚IV、滝口宏編 中央公論美術出版	
		2号	中小?(6ヶ月位幼獣)		(*) 近接		
		②	小(1つは6ヶ月位幼獣)			金子 1970 加曾利北貝塚、杉原荘介編 中央公論美術出版	
31	麻立					武田宗久 1955 千葉県麻立貝塚 年報4	
32	月ノ木 (C-K)	Nr 1				酒誌 1959 前掲書(酒誌大部分同定資料)	
		Nr 2	Pe. Fe. V.			武田宗久 1955 千葉県千葉市月ノ木貝塚、年報4	
33	新田野	②	中			立教大学考古学研究会 1975 新田野貝塚	
34	千鳥久保 (K)					酒誌 1959 前掲書(酒誌同定資料)	
35	吉田六間町					酒誌 1938 神奈川県下貝塚調査概報二、人誌53—2	
36	中ノ窪	①	中			斎藤弘 1940 大山史前学研究所々蔵日本新石器時代家犬遺骨に関する報告、並に内地史前家犬の分類、史前誌12—4 = 5 = 6 (酒誌・漢儀採集、酒誌所蔵)	
37	青木町	②	小 下顎 四肢			斎藤 1940 同上(八幡一郎採集、斎藤弘所蔵資料)	
38	江戸坂					斎藤 1940 同上(赤星直忠採集、所蔵資料、酒誌同定と同一資料?)	
39	吉井城山	②	下顎			赤星 1966年発掘資料(金子同定)	
40	五箇ヶ台	①	小 下顎		*有	斎藤 1940 前掲書(東大人類所蔵)	
41	利島大石山					金子 1959 伊豆諸島文化財総合調査報告第2分冊、東京都教委；613—617	
42	秩父山	①	小 C (若獣)		1号住居址内、人骨	金子 1978 秩父山遺跡 上尾市文化財調査報告第5集、上尾市教委；136	
43	咲畑					直良 1960 咲畑貝塚 知多郡師崎町立師崎中学校；11	
44	清水の上					渡辺誠 1976 清水の上貝塚、知多町文化財調査報告書第1集；10—11	
45	中興					本間潤川 1933 佐渡の遺跡	
46	赤浦	③	小・中小 下顎、M <sup>1</sup> Fe.		人骨	平口哲夫 1977 赤浦遺跡；100—112	
47	永見朝日	Nr 1	小 下顎			斎藤 1940 前掲書(永見中学校所蔵)	
		Nr 2	中小 上顎fr. 頭蓋fr. 下顎、四肢			斎藤 1940 同上	
		Nr 3				酒誌 1951 前掲書(酒誌一部同定、昭和25年試掘)	
48	塚松					直良 1955 石川県羽咋郡塚松貝塚発掘の出土遺物、石川考古学誌7	
49	上山田	④	小 下顎			直良 1973 古代遺跡発掘の家畜遺体；110—112	
		②~	小 C、下顎、Hu. Ra. Fe. Ti.			平口・松井華 1979 上山田貝塚、宇ノ気町教委；100—121	
50	島	③	頭蓋、上顎、下顎	有	貝層中	小池裕子 1983 島遺跡、鳥取県東伯郡北条町島遺跡発掘調査報告書第1集、北条町埋蔵文化財	
51	大橋	②	下顎 Ul. Fe.		貝層・貝層下砂層	石田克 1979 大橋貝塚発掘調査報告書、邑久町教委 報告書2、北条町教委	
52	瀬待				貝層	日野巖・河村幸介 1961 山口県文化財概要第4集、山口県教委；66—71	
53	黒川洞穴				洞穴内土塊	河内貞徳 1967 鹿児島県黒川洞穴、日本の洞穴遺跡、平凡社；314—328	

縄文時代後期家犬骨出土遺跡分布図



第1-d 図

1	船泊						西本豊弘 1983 北海道の縄文・統縄文文化の特質と漁撈、国立歴史博物館紀要 Vol. 4 ; (1982年度分布調査表採資料、北海道教委所蔵)	
2	美々4	小・中小	上顎、下顎、Hu. Pe. Ti. V3~16fr.				西本 1977 美々4遺跡、美沢川流域の遺跡群、北海道教委 ; 42-47	
3	入江	③	上顎、Ra. Pel. Fe. Ti.				北海道虹田郡虹田町 1966・67年調査分(鈴木洋子同定)	
4	三谷(K~B)	⑤	At. Ax. Hu. Ra. Pel. Fe. Ti. Cal. V. 下顎(幼1、若1)				大場利夫・渡辺兼晴 1959年発掘調査分(金子浩昌・西本同定)	
5	ヒョウタン穴(K~B)						芝田清吾 1969 犬、日本古代家畜史の研究 ; 41-70	
6	田ノ浜						吉田義昭 1968 田ノ浜貝塚、年報16(昭和38年度版) ; 74-75	
7	崎山弁天			C			岩手県大船町教委 1974 ; 149-164(金子同定)	
8	門前	Nr 1	小	頭蓋、下顎	有		長谷部言人 1924 Über die Schädel und Unterkiefer von den Steinzeitlich Japanischen Hunderrassen, Arb. Anat. Inst. Univ. Sendai, 10 ; 1-33	
		Nr 2	小		有		金子 1974 門前貝塚、陸前高田市教委 ; 14-21	
9	熊沢	①				埋葬犬	橋本政助 1973 矢本町史1 ; 63	
10	田柄	①	中			全身骨髄	有	埋葬犬
	K中~後	③	中小					
		②	一					
		①	幼					
	K末	⑤	中小					
		③	小					
		①	中小・幼					
				散乱				
11	貝島	④	中	1部	有		金子・西本 1971 貝島貝塚、岩手県花泉町教委 ; 194-197	
		⑦	中小			埋葬犬5体	茂原・小野寺 1986 前掲書(計測値—中型 3 1体)	
		⑤	小					
12	青島	②	中小	下顎			松本彦七郎 1930 Evidence of the Post-Glacial Cycle of Climatic Change in North-Eastern Japan, based upon a Study of the Marine Molluscs and Mammals from the Sites at Daigi, etc. Province of Rikuzen, Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. Sendai Sec. Ser. (Geol.) Vol. XIII, No. 3	
	C末~K初						遊佐五郎 1975 宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告、宮城県南方町教委 ; 130	
		②	小・中小				長谷部 1924 前掲書(東大人類所蔵)	
13	南境	Nr 1	中小		有		茂原・小野寺 1986 前掲書(楠本所蔵資料)	
		Nr 2	中小		有			
		Nr 3	中小		有			
14	宝ヶ峰	②	小				斎藤弘 1940 大山史前学研究所々歳日本石器時代家大遺骨に関する報告、並に内地史前家大の分類、史前誌12—4 = 5 = 6(松本所蔵品)	
15	沼津	Nr 1	中?				斎藤弘 1940 同上(毛利総七郎・遠藤源七採集、直良信夫所蔵資料)	
		Nr 2	中	頭蓋	有		長谷部 1929 人誌11・5( )、長谷部所蔵資料)	
		Nr 3	中				斎藤弘 1940 前掲書( )	
		Nr 4	中	頭蓋、下顎	有		斎藤弘 1940 同上(大山栢昭和4年採集、大山史前研所蔵資料)	
16	響	Nr 1	中小	下顎		埋葬犬1体	松本彦七郎 1930 前掲書(松本採集、東北帝大地質古生物学教室所蔵)	
		Nr 2	中	上顎fr. 下顎			松本 1930 同上、PL XXXI (II)	
		Nr 3	中				斎藤 1940 前掲書(毛利・遠藤採集、直良所蔵資料)	
17	西ノ浜						宮城県教委 1968 西ノ浜貝塚 埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報、宮城県文化財調査報告書第16集 ; 13	
18	金剛寺	①				埋葬犬1体(東斜面貝層)	宮城県教委 1973 金剛寺貝塚、今熊野遺跡調査概報、宮城県文化財調査報告書33(昭和22-23年度宮城師範発掘分、宮城師範所蔵)	
19	下大越						酒誌 1959 日本縄文石器時代食糧総説(西村正尚指示)	
20	下川						酒誌 1959 同上	
21	大畑	⑦					金子・牛沢百合子 1975 大畑貝塚 ; 447-508	
22	南高野						酒誌 1959 前掲書(酒誌同定資料)	
23	旭台						酒誌 1959 前掲書(江坂同定資料)	
24	安食平						酒誌・広瀬栄一 1948 常陸国安食平貝塚、日本考古学1-4、1-12	
25	冬木A		小	下顎6		人骨多	赤沢威	
26	小山台(K末~B)	⑤	小・中小(幼3)				金子 1976 小山台貝塚、図書刊行会	
27	榎塚		♀				酒誌 1959 前掲書	
28	立木						酒誌 1959 前掲書(酒誌昭和23年採集大部分同定)	
29	吉原						西村 1960 吉原貝塚、年報9(昭和31年度版) ; 73-74	
30	新						西村 1970 千葉県神崎町新貝塚(第1次調査)、年報18(昭和40年度) ; 95	
31	大台南	③				人骨	西村・金子 1956 千葉県香取郡大台南貝塚、古代21・22 ; 1-47	
32	中妻	Nr 1					酒誌 1959 前掲書	
		Nr 2		下顎			長岐勉・鈴木正博 1981 取手と先史文化 ; 171-181	
33	良文	①	小	下顎、UL	有		斎藤 1940 前掲書 ; 81-82	
34	我孫子	①	小	全身骨髄			斎藤 1940 前掲書 ; 78-81	
35	上新宿(K~B)	Nr 1				fr.	田中茂徳 1904 紀年遺足会採集品中動物諸類に就いて、東人誌20(224)、113-115	
		Nr 2				埋葬?	直良 1941 下総上新宿貝塚発掘の自然遺物、人誌56-5、295-298	
36	東余野井(西)	①		下顎			直良 1941 古代文化13 1(藤森栄一発掘)	
37	貝ノ花	⑩					金子・鈴木洋子・田中新史 1973 貝ノ花貝塚、松戸市教委	
38	本郷						直良 1942 史前遺跡出土の獣骨(1) 古代文化13-7 ; 411(佐野淡一採集資料)	
39	堀之内	Nr 1		Hu. fr.			田中 1904 前掲書	
		Nr 2					西村・清水潤三 1958 堀之内リハエ地点、年報7	
40	園分寺		小	下顎			斎藤 1940 前掲書(直良採集、所蔵資料)	
41	姥山			(*下顎⑩個体) *	有		松村瞭・八幡一郎・小金井良精 1932 姥山 東帝大人類学教室研究報告第5編 ; 35/山内清男 1942 石器時代の大小屋、民族文化3-8	

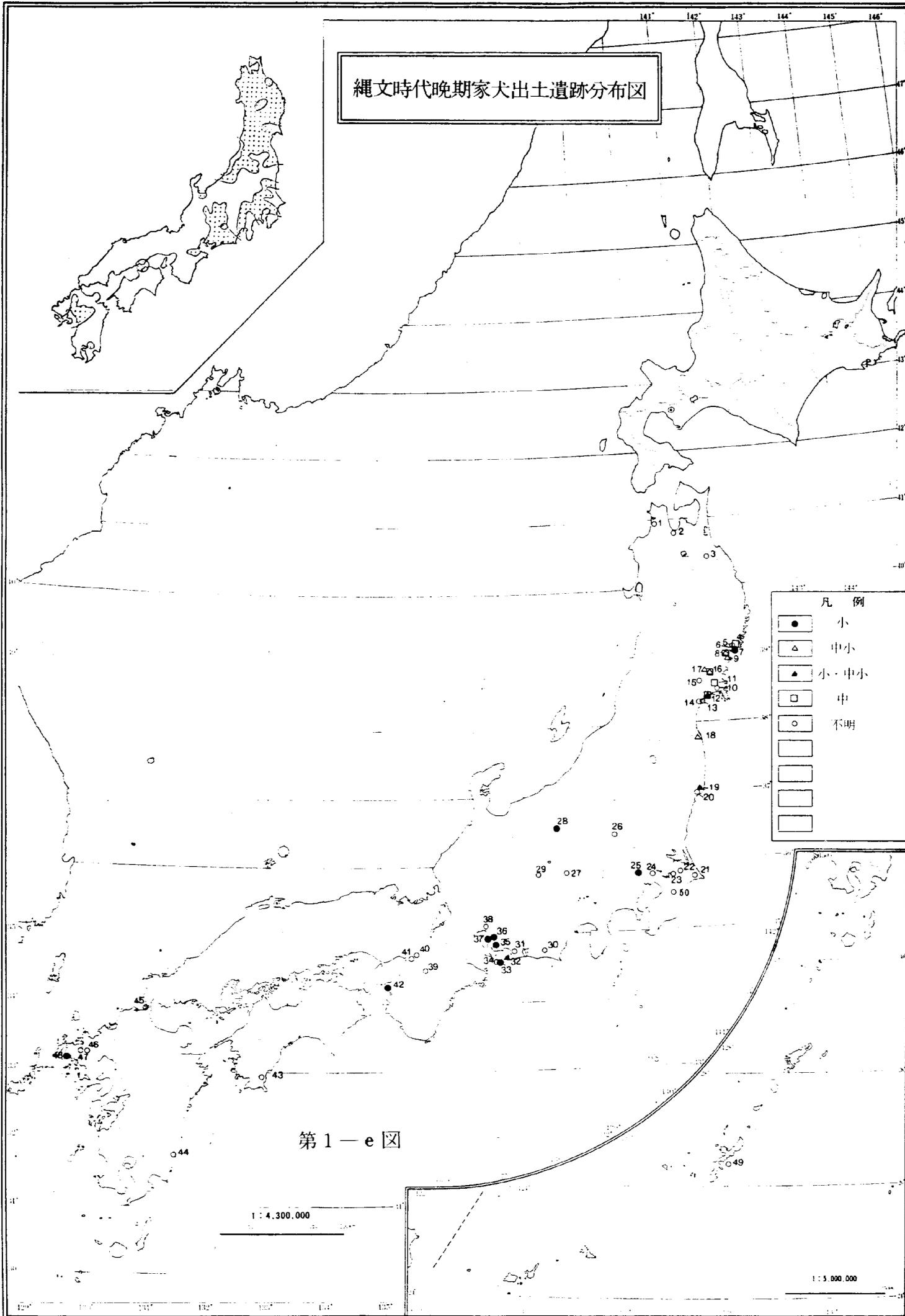
地図No.	遺跡名	標(個体数) No.	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文	献
42	古作		小	下顎fr. 3	有		金子 1985	古作II、船橋市教委;69
43	中沢	Nr 1					酒誌 1959	前掲書
		Nr 2					金子 1965	中沢貝塚、鎌ヶ谷町史資料集2、鎌ヶ谷町史編纂委員会
44	金堀台 (K~B)							
45	宮本台	~⑤~	小	At. C P <sup>4</sup> M <sub>1</sub>	下顎、Ra. Cox. Cal. V.		金子・西本 1974	宮本台I、船橋市教委;64-79
46	境	①		C			金子・牛沢 1980	境遺跡発掘調査報告書第1・II地点、境遺跡発掘調査会
47	草刈湯	①				埋葬大	酒誌 1959	前掲書(酒誌昭和17年踏査)
48	園生						酒誌 1959	同上
49	加曾利	④				埋葬大(ピット1)	金子 1968	加曾利貝塚II、千葉市加曾利貝塚博物館;38-49
50	矢作	②		*幼、成の四肢骨	*有		酒誌 1959	前掲書
		No.1		下半身なし		埋葬大、埋葬人骨と同一地域		
		No.2		頭部~上半身なし			千葉県埋蔵文化財センター 1981	千葉市矢作貝塚;134-135
51	主理台	Nr 1					酒誌 1959	前掲書
		Nr 2					金子 1978	縄文時代遺跡出土の動物遺存体(2)、考古学ノート7;1-18
			小		有		茂原 1986	前掲書
52	檜橋						酒誌 1959	前掲書
53	木戸作	Nr 1	中小	(C Hu. Ti.) 同一個			諏訪元・山田格・阿部修二 1979	千葉東南部ニュータウン七 木戸作第II次、千葉県文化財センター、
		Nr 2		(下顎、C) 同一個				
		Nr 3		(At. Ax. Ul. Pe. Ti. Mc.) 同一個				
54	築地台?							
55	菅田高田					埋葬大	酒誌・原弘 1954	菅田高田貝塚、学習院高等科史学部;20-23
56	西広	①				貝層 下土層	金子 1983	西広貝塚4次調査、七総国分寺台発掘調査概報
57	姉ヶ崎	①		下顎、Hu. pe. Fe. Tib.	*有		山内 1942	前掲書;19-20(山内採集、長谷部所蔵資料)
58	飯富	②	小	1個体分、若干のまとまり			金子 1973	袖ヶ浦町山野貝塚、千葉都市公社;226
				四肢、下顎骨(擦り切り)			金子 1961	上高根貝塚、南総郷土文化研究会会報第1号、12-20
59	上高根						村馬郁夫 1960	木更津市紙面上高作貝塚 年報9(昭和31年度版);75-77
60	上深作						金子 1958	龍山鉦切洞窟の考古学的調査、早大考古学研究室報告第6冊
61	鉦切洞窟	①		fr. 4			古田格 1940	埼玉県石神貝塚調査、人誌55-11
62	石神						酒誌 1959	前掲書
63	小豆沢	Nr 1					直良 1942	前掲書(直良採集資料)
		Nr 2					斎藤 1940	前掲書(江坂採集、所蔵資料)
		Nr 3	小	C			斎藤 1940	同上(国学院大所蔵資料)
64	西ヶ原	Nr 1	小	下顎				
		Nr 2	中	頭蓋			酒誌 1959	前掲書(酒誌同定)
65	日本丸						酒誌 1938	学翠点描、貝塚1
66	大井権現台						直良 1942	史前遺跡出土の獣類(九)、古代文化13-5(松岡所蔵資料)
67	馬込	Nr 1		頭蓋(幼)				
		Nr 2	中小	下顎fr.		土壌内埋葬大		
		Nr 3	中小			土壌内埋葬大	菊池義次・野本孝明 1984	大田区馬込貝塚遺跡の調査、東京都遺跡調査・研究発表会区 発表要旨、武蔵野文化協会
		Nr 4						
68	大森	Nr 1		fr.		埋葬大	E・S モース 1878	大森貝塚、東京帝国大学
				全身骨骸			清水潤二 1977	大森貝塚の発掘、考古学研究24-3-4
69	上沼部		中小	下顎fr.			直良 1942	前掲書(佐野淡一所蔵資料)
70	下沼部						直良 1942	史前遺跡出土の獣類(十)、古代文化13-6;353(直良発掘資料)
71	小仙塚						酒誌 1938	神奈川県下貝塚調査概報二、人誌53-2
72	荒立	①	小	P <sup>4</sup> 四肢			斎藤 1940	(酒誌採集、所蔵資料)
73	稲荷山	①	小	全身骨骸 他③~	*有		斎藤 1940	(酒誌採集、資料)
74	三沢	①	小				酒誌 1959	前掲書(酒誌大部分同定)
75	保土ヶ谷	①	小	下顎 Pe. fr.	*有		斎藤 1940	前掲書(酒誌所蔵資料)
76	三蔵台	②	小	下顎	*有		斎藤 1940	同上(同上)
77	屏風ヶ浦森						西村 1954	年報2
78	杉田	Nr 1		下顎	*有		斎藤 1940	前掲書(酒誌所蔵資料)
		Nr 2					直良 1942	史前遺跡出土の獣類(四)、古代文化13-7、411(芹沢長介所蔵)
79	青ヶ台	②~	小	(幼有)			佐野大和 1943	横浜市青ヶ台の石器時代遺跡、古代文化14-7
80	称名寺	No.2	小				金子 1984	称名寺I
81	榎戸						酒誌 1938	前掲書
82	堤						岡本勇 1967	神奈川県茅ヶ崎市堤貝塚、年報15(昭和37年度版);104
83	万田	Nr 1					酒誌 1938	前掲書(酒誌一部同定)
		Nr 2				配石墓内焼骨粉中		
84	平沢同明?						杉山博久・平野吾郎 1969	神奈川県秦野市平沢同明遺跡の調査、古代52;11-30
85	大畑					埋葬	岡本勇 1955	静岡県小笠郡大畑遺跡、年報4(昭和26年度版);87-88
86	西	①			有		清野謙次 1925	日本原人の研究 岡書院
87	蛭塚	Nr 1	小	下顎	有		長谷部 1921	前掲書(長谷部所蔵)
		Nr 2					直良 1957	58・60・61、蛭貝塚第1~4次発掘調査報告、浜松市教委
88	大蚊里	Nr 1		下顎			酒誌 1951	前掲書(久永春男採集、伊藤博敏保管)
		Nr 2				埋葬人骨	酒誌・鈴木尚 昭和23年調査(伊藤博敏保管)	
89	中条						直良 1951	中条貝塚、刈谷市教委、37-40
90	下内田						酒誌 1951	(酒誌 昭和17年踏査)

地区No.	遺跡名	標(個)本体数	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文	献
91	大草						酒誌 1951 前掲書(酒誌同定、昭和17年頃?)	
92	三宮						直良 1942 史前遺跡出土の獣骨(骨)、古代文化13-7(和島誠一採集資料)	
93	佐目洞窟						直良 1942 同上 (小牧・藤岡両氏採集)	
94	浜詰						同志社大考古学研究室 1958 浜詰遺跡発掘概報、網野町教委(酒誌同定)	
95	彦崎				人骨多		池業須藤樹 1971 岡山県児島郡瀬崎町彦崎貝塚調査報告、東大理学部人類学教室; 9-11 (昭和23年調査)	
96	津雲	Nr 1	小	上顎 fr.			松本彦七郎 1917 介塚の犬の二型あり、動物学雑誌344; 25-26	
		Nr 2	中小?	下顎		有	斎藤 1940 前掲書(長谷部採集、所蔵資料)	
97	半城						大飼徹夫 1982 狩猟・漁撈の生活文化、愛媛県史 原始・古代、37-214	
98	新延			下顎 Ul.		有	木村幾多郎 1980 新延貝塚、鞍手町埋蔵文化財調査会; 95-113	
99	小池原	④		下顎			小池史哲 1973 小池原貝塚、横尾貝塚出土の自然遺物、考古学論叢1、別府大考古学研究会; 87-93	
100	下桶田						清野謙二 1925 日本石器時代の犬、日本人の研究; 293-294	
101	阿高						山崎純男 1978 阿高貝塚、城南町文化財調査報告書、城南町教委; 14-19	
102	西平						酒誌 1951 前掲書(酒誌同定資料)	
103	出水	⑦	小4	上顎 fr. 下顎、Hu. Ul. Ra. Fe. Ti.	有	中3	長谷部 1921 出水貝塚の貝殻、獣骨及び人骨、京都帝大文学部考古学研究报告6; 13-27	
104	市来						河口貞徳・西中川駿 1985 鹿兒島県下の貝塚と獣骨、季刊考古学11、43-47	
105	草野						河口貞徳 1952 草野貝塚発掘報告、谷山考古学同好会	
106	出津						安楽勉 1985 西海・五島列島をめぐる漁撈活動、季刊考古学No11; 39-42	
107	宇宿	①	小	Ul.			林田重幸 1959 宇宿貝塚出土の自然遺物、奄美 自然と文化、九州会連合奄美大島共同調査委員会; 249-259	
108	徳之島	①~	小	上顎 Hu. Fe.			斎藤 1940 前掲書(大山史前研保管)	
109	萩堂	①~	小	下顎 Hu. Ra. Ul. Fe. Ti. Tal.	*有		松村瞭 1920 琉球萩堂貝塚、東大理学部人類学教室報告; 8-14(東大人類学教室所蔵)	
110	崎樋川	③?	小	上顎、下顎、Hu. Fe. Ti.	有	埋葬犬1	三宅宗悦 1932 琉球崎樋川貝塚出土家犬に就て、人誌47-10(島田真彦氏採集)	
111	久里原(前II、IV)	②		頭蓋、上顎、下顎			川島田次 1981 久里原貝塚範圍確認調査報告書、伊平町教委; 39-51	
112	室川(前IV)						長谷川 1978 沖国大考古、沖国大考古学研究室; 7-8	

第1-d表 (縄文後期)

地区No.	遺跡名	標(個)本体数	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文	献
1	亀ヶ岡						村越深 1975 青森県の原始時代、青森県の文化シリーズ11、北方新社; 81	
2	大浦							
3	中蔵空蔵						村越 1959 青森県三戸郡蔵空蔵貝塚、年報7(昭和29年度版)	
4	大洞	B Nr 1		頭蓋、下顎、Hu. Fe. Ti. ~		有(長谷部)	長谷部言人 1925 陸前大洞貝塚発掘調査所見、人誌40-1	
		B Nr 2		頭蓋、下顎、Hu. Fe. Ti. ~			長谷部 1929 日本石器時代家犬に就て、追加第三、人誌44-5、163-174	
		D				埋葬犬	斎藤弘 1940 大山史前学研究所々蔵日本石器時代家犬遺骨に関する報告、並に内地史前家犬の分類、江坂輝弥 1970 縄文時代における犬の埋葬骨格、考古学ジャーナル40 史前誌12-4=5=6	
5	下船渡						江坂 1970 同上(大船渡市教委昭和36年発掘分)	
6	瀬沢						金子浩昌・今橋浩一 1975 瀬沢貝塚、岩手県陸前高田市教委; 5	
7	中沢浜	⑥?			有	人骨多	長谷部 1924 Über die Schädel und Unterkiefer von den Stenzeitlich-Japanischen Hunderassen., Anat. Inst. Univ. Sendai, 10; 1-33	
		⑥	小	下顎			斎藤 1940 前掲書	
						南斜面砂層 埋葬犬	西本豊弘 1985 中沢浜貝塚発掘調査概報I、陸前高田市文化財報告第9集、陸前高田市教委	
						産期死亡児塚2		
8	田柄	⑤	中小3			埋葬犬	茂原信生・小野寺覚 1986 田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について、宮城県文化財調査報告書第111集、田柄貝塚; 589-672	
9	境		中3					
			幼2					
			中小3	頭蓋		有	茂原・小野寺 1986 前掲書(長谷部採集、東大人類学教室所蔵資料)	
10	前山岡						松村瞭 1920 琉球萩堂貝塚、東京大学理学部紀要; 8-14	
11	前浜	Nr 1					酒誌 1959 日本縄文石器時代食糧総説	
		Nr 2	中	全身骨格	有	女性人骨と合葬?	小井川和夫 1979 前浜貝塚、宮城県本吉町教委; 14-15	
12	里浜	④♀3	小			埋葬犬	岡村道雄 1982 里浜貝塚I-宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究I-、東北歴史資料館; 63-69	
		①♀	中小			埋葬犬?		
		①♀	中			土壌中?埋葬犬		
13	二月田	①					宮城県塩釜女子高社会部 1970・71 二月田貝塚I・II 貝輪6・7	
14	沢上						後藤勝彦 1970 沢上貝塚 年報18(昭和40年度版); 82	
15	中沢目			上顎、fr. Met. fr.		他の骨に犬の咬痕多	松井章 1984 中沢目、東北大学文学部考古学研究会; 127	
16	館	⑬	中小			埋葬犬(11)	林謙作 1971 宮城・浅部貝塚出土の動物遺体 分析と考察、物質文化17; 7-21	
			中					
						有	西本豊弘 1983 イヌ 縄文文化の研究 2巻 生業、雄山閣; 161-170	
17	富崎	①	中小3	頭蓋		有	後藤勝彦 1970年度発掘分	
						有	西本 1983 前掲書/茂原・小野寺 1986 前掲書	

縄文時代晩期家犬出土遺跡分布図



凡例

●	小
△	中小
▲	小・中小
□	中
○	不明
□	
□	
□	
□	

第1-e 図

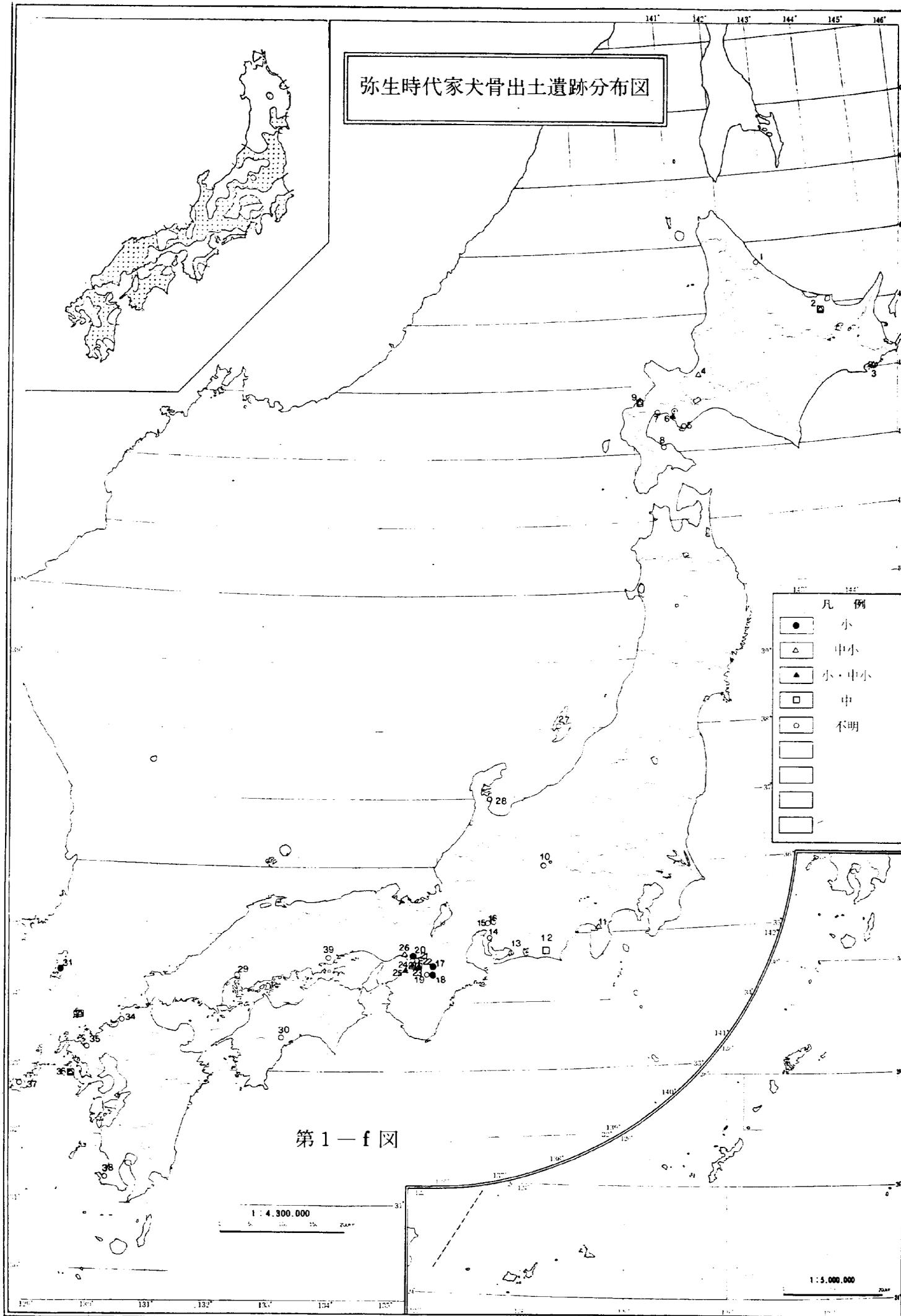
1 : 4,300,000

1 : 5,000,000

地図No	遺跡名	標本(個数) No	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文	献
18	三貫地	Nr 1 Nr 2 Nr 3 Nr 4~6 Nr 7・8 Nr 9・10	小 中小 中小	頭蓋、下顎、四肢~	有		長谷部 1925 日本石器時代家犬に就て 追加、人誌40-1 直良信夫 1973 古代遺跡発掘の家畜遺体;198-210 甲野勇 1952 福島県相馬郡三貫地貝塚 年報5、59-60 吉田裕 1964 三貫地貝塚 福島県史6 山崎京美 1981 三貫地遺跡、福島県三貫地遺跡調査団;110-125	
19	薄磯	Nr 1 Nr 2	小 中々	(下顎、Hu. Ra.)	有		牛沢百合子 1979 考古20、福島県立磐城高校史学部 大竹憲治・山崎京美 1983 骨折したイヌをいつくしんだ縄文人、アニマ121	
20	寺脇	①		全身骨格			磐城市教委 1966 寺脇貝塚	
21	余山	②	幼、成	下顎(幼)、Fe.(成)			酒詰 1959 前掲書	
22	奈土						早大附属高等学院史学部 1958 千葉県香取郡奈土貝塚発掘調査報告書;97-122	
23	荒海						西村正衛 1974 荒海貝塚(第一次調査)、学術研究-地理歴史社会科学-、早大教育学部	
24	貝ノ花	①					金子浩昌・鈴木洋子・田中新史 1973 貝ノ花貝塚、松江市教委	
25	ト伝						金子 1978 縄文時代遺跡出土の動物遺存体(2)、考古学ノート7;1-18	
26	下網谷戸	①?		焼骨 fr. ?		石塚1号墓盤土中の骨片中に大骨有	園田芳雄 1977 下網谷戸遺跡、下網谷戸遺跡調査会;13(長谷部鑑定)	
27	金生					配石墓中?	新津健他 1980年度発掘調査時、丹羽所見	
28	保地			下顎			関孝 1966 長野県地科部保地遺跡発掘調査概報、考誌51-3;25-43(長谷川善和鑑定)	
29	野口			全身骨格?		配石上に21個体の大骨と1個体の大	林茂樹 1970 信濃における縄文時代墓制の様相、信濃22-11、1145-1154P.P	
30	見性寺						金子・鈴木 1974 遠江見性寺貝塚の研究、磐田市郷土博物館報告 第11輯;39-41	
31	平井稲荷山	①		全身骨格?		大骨17体分、嬰棺	酒詰 昭和18年踏査、発掘	
32	吉胡	②	小? 中小3(各2)		有	小土壇内3 大型土壇内女性人骨四周より4埋葬大		
33	伊川津	④ ④ ~⑧~	小? 小?	全身骨格		1体は埋葬大(混具) 2体は土壇内埋葬大	直良 1972 伊川津貝塚;13-11 西本ら 1983年国立歴史博物館による発掘調査	
34	保美	① ⑨~				*有 人骨群中に大骨 埋葬大	山内清男 1942 石器時代の夫小屋、民族文化3-8;19-20(東大入加昭和11年発掘分) 江坂 1970 前掲書 小野田勝一 1977 保美貝塚調査概報;4	
35	結木宮	①♀? ④♂1	小? 小?			浅い土壇中	直良 1981 結木宮貝塚I、西尾市教委;5-35	
36	本町谷	♀2 幼1	小	全身骨格 その他 fr. 12~	有	ピットNo17より3体 No2号大と幼大合葬	直良 1973 前掲書;220-233	
37	宮西	①	小	全身骨格			直良・吉岡郁夫 1965 宮西貝塚、東浦町教委;8-11	
38	雷						紅村弘 1963 東海の先史遺跡 総括編(酒詰昭和17年末訪同定)	
39	檀原						酒詰 1961 檀原 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊;252-280 金子 1980 三世紀の考古学、学生社;108-109 檀原市千塚資料館 1983 遺跡発掘調査の成果、檀原市教委	
40	日下						直良 1943 近畿古文化叢考、葦牙書房	
41	森の宮						樽野博幸・石井みさ子 1978 森の宮遺跡 第3・4次発掘調査報告書;160-165	
42	鳴神	①~	小		有		金子 1968 鳴神貝塚発掘調査報告、和歌山県文化財学術調査報告書第3冊、和歌山県教委;55-59	
43	中村						岡本健児 1968 縄文時代 高知県史考古編;13-106	
44	松添			頭蓋(若)その他		人骨	賀田光夫 1967 宮崎県宮崎市青島松添貝塚、年報15;122	
45	六連島						小野忠熊 1961 六連島遺跡 山口県文化財概要第4集、山口県教委;46-60	
46	宇木渡田			2C		乳児骨	永井昌文 1982 宇木渡田貝塚、未産園 唐津市周辺遺跡調査会;135-178	
47	菜畑			大歯穿孔品			渡辺誠 1982 菜畑 分析考察編、唐津市教委;399-419	
48	宮の本遺跡	①	小 小?	Hu.		土壇・包含層	牛沢 1981 宮の本遺跡 佐世保市教委;133-134 木村幾多郎 1970 高橋南貝塚 熊本県教委;85-95	
49	仲原(B~YZ)						当真嗣 上原静 1981 伊計島の遺跡、沖縄県文化財調査報告書、沖縄県教委;17-18、38	
50	山武姥山	④~					林・西本 1986 縄文晩期-弥生前期の狩猟と儀礼、環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼;26-42	

第1-e表 (縄文晩期)

弥生時代家犬骨出土遺跡分布図



第1-f 図

地区No.	遺跡名	標本(個体数)	分類	残存部位	計測有無	出土状況	文献
続縄文						続縄文	
1	ウスタイベ						
2	開成4	②	中小・中	2P <sup>4</sup> 2M <sub>1</sub>	有		
	下田ノ沢	①	中小(1才半位)	頭蓋		人骨3	沢四郎 1972 厚岸町下田ノ沢遺跡 北海道発掘シリーズNo.8、厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会
4	江別太	②	中小	頭蓋、下顎、Ul. Fe. Cal.	有		西本豊弘 1979 江別太遺跡、北海道先史学協会；103-104
				At. Ax. /下顎			
				M <sub>1</sub>			直良信夫 1939 北海道室蘭本輪西貝塚発掘の獣類、人誌54-10
5	本輪西						
6	南有珠6	②	小・中小?	頭蓋、下顎、At. Hu. Rib.			西本 1983 南有珠6遺跡、札幌医科大学解剖学第二講座
7	小幌	②		Ul. Ti.			北大解剖学教室調査団 1963 小幌洞穴遺跡、北方文化研究報告第18輯
8	尾白内						金子浩吉・西本鑑定資料
9	栄磯	②~		At. Hu. Ra. Fe. Ti.		人骨片	金子 1973 栄磯岩陰遺跡発掘報告、北海道島牧村教委；58
弥生						弥生	
10	樋口五反田 (Y.k)					No16住居址内(焼骨)	直良 1972 長野県中央道理蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町、長野県教委
11	丸山 (Ye)	①~	中小	Ul. Tib.			牛沢百合子 1976 丸山遺跡出土の獣類遺存体と骨角加工品、沼津市歴史民俗資料館紀要1、81-82
12	土橋	①	中	(下顎、Ax. Hu. Ra. Pe.)		土壌内出土、埋葬	金子 1985 土橋遺跡、袋井市教委
13	瓜郷						直良 1963 瓜郷、豊橋市教委；95-104
14	入海						中山英司 1955 入海貝塚、南山大学人類学研究所；57
15	西志賀						直良 1942 史前遺跡出土の獣骨(中)、古代文化13-6；355P P (樋口発掘資料)
16	朝日 (Y.c)	⑤				イノシシ目立つ	渡辺誠・磯谷和明 朝日遺跡1・本文編、愛知県教委；257-264 (昭和55年調査分)
17	唐古 (Y.z)						直良 1937 唐古 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第16冊、221-231
	唐古鍵	①	小	脳頭蓋		土壌内	寺沢薫 1981 唐古・鍵遺跡 第10・11次発掘調査概報、田原本町教委・福原考古学研究所；6-16
18	大福 (Y.k)		小	全身骨格	有	土壌内の長頸壺形土器内に 各部位詰まる	樽野博幸 1978 大福遺跡、奈良県史蹟名勝天然記念物報告第36冊；127-129
19	坪井 (Y.zc)						
20	東奈良 (Y.z)	①	小	下顎	有		友部みき子 1981 東奈良発掘調査概報II、東奈良遺跡調査会
21	瓜生堂 (Y.c)			(I Ⅲ C. M <sub>2</sub> P)		与形周溝築の主体部、 近接した土壌	西田正規 1980 瓜生堂 大阪文化財センター；451
				(鎖椎、Hu. Ul. Ra. Fe)		5ヶ所より出土	西田 1981 巨摩・瓜生堂 大阪文化財センター；317-318
22	鬼虎川 (Y.zc)			頭蓋			樽野 1980 鬼虎川遺跡調査概要I、東大阪市教委；30-32
23	亀井	①~④	小2~		有		宮崎泰史 1982 亀井遺跡、大阪文化財センター；183-230
		20~30個体	中小5			すべて溝中出土	山口誠治 1983 亀井、大阪文化財センター；247-250
			中8		有	土壌・墓中無し	宮崎 1984 亀井遺跡II、大阪府教委；337-354
			?6				
24	恩智	⑥	小2			溝中(原位置は土壌内?) 人骨と併存	友部 1980 恩智I・II、瓜生堂遺跡調査会；221-223、162-163・II、同版
			中小③				
			中①				
25	池上	⑤~	小	(頭蓋、At. Ax. Ra. Pe. Ti. Tal. V3. Dig.)			金子・牛沢 1975 池上・四つ池遺跡第6分冊自然遺物編、大阪文化財センター
			中小	Rib. Sca. Pe. Fe. Ti. ...fr.			
			幼(胎・新生児)				
26	田能 (Yz.k)			胸椎2、腹椎		溝中	金子・丹羽百合子 1982 田能遺跡発掘調査報告書 尼崎市文化財調査報告第15集 536-554
			中小	Fe. fr.		溝中	
27	浜瀧洞穴 (Y~中世)						計良勝範 1981 浜瀧洞穴遺跡、年報21=22=23 (昭和43~45年度版)；199
28	大境洞窟		中?				斎藤 1940 大史前学研究所々蔵日本石器時代家大遺骨に関する報告、並に内地史前家大の分類； 史前史12-4=5=6 (東大人類所蔵)
29	沖(北) (Y)			下顎			吉野益見 1925 広島附近の貝塚、考誌15-1、51-55
30	竜河洞洞穴 (Y、k)			Fe.			岡本健児 1959 竜河洞の遺跡、高知県文化財調査報告第10集；1-43
31	住吉平 (Y、z)	②	小	fr.			金子 1975 村馬の遺跡、長崎県教委；75、149
32	カラカミ (Y-k)	2~3 (幼)					仙波輝彦 1960 長崎県志岐島中期及び後期弥生式時代遺跡出土哺乳動物骨の研究、人類学研究7-1・2 (東亜考古学会 松永氏採集)
33	原ノ辻	⑧	中小5	頭蓋(中小2)、下顎(中小7、中1)	有		仙波 1960 同上
		②	幼	Se. (中小)、Hu. (中小1、中3) Ti.			
34	東町 (Y.k)			上顎、下顎		埋葬大	橋口達也 1973 東町遺跡出土の獣骨、鹿部山遺跡、九大文学部考古学研究室、252-253
35	柏崎 (Y.z)			大骨?			鏡山猛 1966 北部九州(唐津市)先史集落遺跡の合同調査、昭和40年日仏合同調査概報、佐賀県内 遺跡調査報告1、九大文学部；7-11
36	串島 (Y?)		中~中小	Fe. fr.		貝層中	木村幾多郎 1980 串島遺跡、長崎県文化財調査報告第51集、長崎県教委；147-153
37	高神 (Y?)						直良 1942 史前遺跡出土の獣骨(中)、古代文化13-6；351-356P P
38	高橋 (Jb~Yz)			大歯穿孔品			金子 1980 三世紀の考古学、学生社；90
39	門田 (Y.z)	⑤		やや大きい			林謙作・西本 1986 縄文晩期~弥生前期の狩猟と儀礼、環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・ 配分・儀礼；28-29

第1-1表 (弥生時代)

